適用。氏の療養法に適する患者は、神經衰弱、ヒステリーの如き神經系疾患のみならず、消化、呼吸何病なりともであるが、殊に慢性不治性にして他の物質療法に失望悲觀せるもの、自癖が疾病の原因をなせるもの等を主としておる。其他病弱者一般の攝養法を學びたきものを歡迎する。

具體治例を見るに神經衰弱、慢性胃腸病、慢性糖尿病、慢性肋膜炎、慢性腹膜炎等で、其等の多くは、其實、當該疾病の恐怖症と、軟衞生法、或は物質療法の濫信、濫施にあるを見る。一二の神經衰弱者に於ては上長に反抗するの性癖が原因となり、救はれたのもあつた。或は胃癌の場合、萬已むを得ず不治を宣告し、浮世を解脱し、歡喜、感謝の生活に入らしめ、模範往生を遂げしめ、宗教にあらずして宗教の用をなせし場合なども ある。

評。 以上は氏の療養法の大要なるが、氏は二十年來斯うした主義を定め、献身的に之に從事しておるが、本邦治療界に於ては、醫師にして精神療法主義の實地家は非常に乏しく、氏の如きは實に鶏群の一鶴、醫界並びに社會の一異彩として敬重すべきであらう。殊に其主義理想は、慥かに治療界の時弊を救ひ、從つて民人に幸福を與ふるの偉大なるは否むべからずであること思ふ。

今其治療法の意匠を見るに、身神相關の外、精神界に於ては、知情意各方面に相當に注意せられて居る樣だが、全體に就て、活動を重んずる上より見れば、意志修養の主なる、技術の上より見れば說得法の主なる一の復合精神療法と見做すべきである。說得療法としてヅボア氏の其れと比較すると、說得に依りて攝養法を自得し、自敎育の途を拓き、身心の健康を期する點は全く同一だが、別所氏のはヅボア氏のより進んで、尙ほ感情療法を顧慮せる點は長所で、且別所氏のは個人說得のみならず、衆人への講話方式を採つておるから其間に衆人暗示や、又氏の望む共助共益の精神修養には利益があるであらう。卽ちヅボア氏の說得法は全所作としてはたゞ理性の方面よりするので其結果に於ては別所氏の法式と同じきものであるが、別所氏が感情方面の外、それを共同生活の演習に應用する所に長所がある。

唯茲に一言したきは、氏の療養主義には、患者の體質及び性格の診定及び其處置に重きを置かれておるが、其中如何にも自癖に因する神經衰弱樣患者の治驗例は、これあるも、サテ如何なる患者の體質殊に性格者の疾病は、氏の療養主義に不適當であるや、又最も適合するにや、

其邊の學術的統括的報告はまだ見へぬ樣である。多くの患者は、如何にも氏の所謂相助丹、常笑水、展眉膏等にて、性癖の改善、病症の輕快は圖かり得べきも、他方には又患者の性格によりては、施術者の教訓に極めて非順應的で、例へば初めよりして精神の根核が排他、無同情に傾き、或はニコ〳〵が餘り必要でなく、或は初めより質實迎苦の生活に甘んずる如き（例へばクレッツメル氏の乖離型、ユング氏の內向型の或るもの、餘論參照）、所謂五ヶ條主義に極めて非適合的のものあるべく察せらる。されば精常主義は一面に於ては大に開拓せられたる如きも、他面に於ては、恐らく更らにx、y、z、丸の新精神藥を工夫して開拓すべき不毛の地の多々橫はるにあらざるか。この邊には具體的工夫がなければならねと思はれるが如何。單に心に就て見ても、調和といふ大平野に於て一方の原野は大いに開拓せられたけれども、他方には未だ不毛の地の廣漠たるものが存ずるのではなからうか。別所氏が年來、執り來れる方針を見るに、展眉、相助等の五箇條の外形はいつも同じであるらしいが、其說くところの內容は、心身に關する諸料學が進むにつれて改善されてあるやう觀られる。例へば內分泌說が採られたり交感神經緊張異常の概念を應用して、疾病の觀察法を改めたるが如き、常に研究と努力が拂はれてゐるやうである。殊にクレッツメル氏の所謂內敏外鈍の性格や、或は又內向性感情型に似たるものに注意せられてゐるが如きによりて、予の所謂不毛の地が漸次に開拓せらるべきを信ずる。遙莫、別所氏の方法はヅボア氏の療法と一致する所多しと雖も、おのづから特異の樣式がある。採つて以て參考となすべきである。

若し其れ此體質及び性格に關する事項は、別に卑見があるから、早晩別著を以て世に問ふ積りである。

（九）夢幻的療法

モール（Mohr 1908）ファレッ（Farez 1908）等によつて唱へ出された特殊療法である。その原理とする所を簡單に云へば、夢は外界の刺戟により、その內容の性狀や情調をやゝ人爲的に變更し得ると云ふのであつて、之れ等學者の實驗結果から出でたものである。主として小兒、ヒステリー、その他夢から起つた精神病者に用ふ。卽ち惡夢が原因となり、或は症候として現はれ來る病者には睡眠中音樂を聞かせ、芳香を嗅がせ、若しくは快き觸覺を與えて夢の內容及び

其情調の變更を圖るのである。

但し此療法は極めて制限された特殊療法であるだけに、實際上、多く利用されては居ないやうである。從つて精神療法の一手段としては閑却されてゐるの實狀である。

（十）精神療法と死の觀念

信仰から來り、または哲學思想から來り人が疾病となつた際に於ける最高にして且つ最有力なる精神療法は死の諦めの觀念である。死を以て天命である、或は正理なりと教ふる所の宗教及哲學は精神療法上、大きな意義を有つて居る。是等の信仰や哲理を抱くものは、治病上無二無上の良藥を有するものである。

前章に述べた信仰は、疾病は必ず治るとの信仰であるが、茲に謂ふ意味はその反對であつて人は早晩死すべきものである、死を避けることは不可能である、死は正理である、死は天命であるとの信念を養つて置くときには一朝重病に罹れるときも疾病に對する一切の恐怖を去り、精神の活動を自由にし、爲めに精神療法の効果を奏するものである。蓋し人が疾病になつた際に、最も恐るる所のものは卽ち死其物である。死の杞憂あるが故に多少の難病に罹れば恐怖に恐怖を重ね、徒らに悲觀に陷りて元氣も沮喪し、眠食も之が爲に廢するに至る。かくなれば病症に害あるは云ふまでもないが、若しも此際諸行は無常であり生者必滅は避くべくもなく、往生すれば極樂に往き、永眠せば天國に上り父の御前に侍するとの敎へを信ずる者にありては慢性不治の疾患に罹るも毫も心思を煩はすなく、未來の光明と希望は滿ち、所謂信仰に徹した樂觀を持する。而してこの心的態度は、患者の生理機轉を妨ぐることなく、且つすべての理化學的及心理療法は十分に其作用を發揮するを得て、自ら顯著なる効果を見ることが出來るのである。醫家が醫學的又は哲學的思想によりて死を諦認する狀は、こうした信仰者に髣髴たるものがある。解剖臺上に横はる死屍を剖檢し、肺臓の大部が膿狀に崩壞し、これを顯微鏡下に窺へば瓦斯交換に必要なる囊泡組織は壞滅し、血管悉く消滅或は破壞せる肺結核患者に誰か生存の理あるを發見する事が出來ようぞ。腦表面の神經組織が變壞し、これに代るに不用減分を以て充滿する麻痺性痴呆に誰れか精神の健全を企圖し生命の救治を願ふものぞ。大は生物の新陳代謝、世代の變換せなければならぬ現象より、小は細胞組織の死活の理由を暗らんずるものが不

治の疾病に罹り、死を諦認し、死の眞理に滿足し、從容として天命を俟つは寧ろ當然の歸趨である。斯くして宗教的哲理的信仰は皆難症に罹り死を諦認し、死活の大事に遭遇して能く心身機能の整正を保ち治療の利益を來す所以である。若し夫れ信仰上死を恐れざるにもせよ、又必治の信念あるにもせよ、餘りに樂天にして醫師の治療を輕視するに至れば、其所に弊害は釀されるのであるから是又宜敷三省すべきである。

蓋し斯く云ふも其等の信仰は各人の有するところではない。また各人に其修養を必期すべくもない、然かしそれは疾病の際に於ける最貴最强なる藥石の一つであるが故に、聊かこの理由を說いて宗教上の信仰あるもの、及び智の開發を好む人々に平常に於て其修養を慫慂したいのである。

（十一）禪の心理と精神療法

前章には催眠術や精神分析法により、患者の精神に技術的操作を施し或は一定の意識狀態を作爲し、或は無意識界より記憶を呼び起し、これを精神療法の手段となすことについて述べた。其處で、茲に見遁すべからざるは東洋に於ける佛教の禪のことである。禪は本來宗教信仰に關する手段のものであるが、然かし禪に於ける心理其物を見るなれば、精神を安慰にし、人の性情を改革し、延ひては病弱者、煩悶者を救ふの醫的精神療法となる事項が澤山に含まれてある樣である。殊に禪の心的狀態や、教理に關しては、獨り催眠術や精神分析に於ける幽微なる精神機能に對して種々のコントラストや理解を與へる便あるのみならず、全精神療法に關して、重要なる基礎的原理を教ふるの節も尠くはないと考へる。但し自分は參禪もせず、悟徹せる經驗もなく、然かも禪の心理を記述せんとするが如きは、誠に以て鳴滸の次第ではあるが、暫く諸般の文籍によりて其大體を錄し精神療法の一參考にしたい。就中其の文籍は主として文學士入谷智定氏の研究（禪の心理的研究、大正九年）に俟てるもの多きを茲に明かにして感謝する。若し其れ誤解或は淺見の如き宜敷斯道者の示教を俟つものである。

禪の目的は一切の妄念雜慮を止め、正身端座して直ちに自己の本心本性を徹見するにある。他の言葉を以て云へば、內觀自省して自我の本體を直覺し、宇宙の絕對心と冥合融卽せんことを期するのである。禪は此樣な精神狀態となることを訓練するので、そこに大安心不動の信仰

が出て、日常の生活に於ては情意が大なる鍛錬を受けて精神の滿足、精神上の向上を來たし、自他の存在を幸福ならしむるのである。

一　修禪に要する方法

先づ食物、睡眠、場所に就て說かう。

食物は殊更に粗食するの必要なく、常食にして體力を維持する丈の榮養物を攝るのが適當である。四十五人の修禪者中八五％は然りであつた。併し其量は之を節すべしこは何れも相一致する。是れ後に言ふ如く連日靜座運動を缺く等の點からも生理上多量を要せないのであらう。但し少數のものに於ては可成滋養物を必要なりこ云ひ、又前記の十五％の人は粗食を必要であるこしたが是れ恐らく其人の體質によつたのであらう。而して食物の種類は何れにしても酒類其他刺戟性强き香料(五辛)を忌むのである。

睡眠は八〇％の人は充分に或は普通に之を採るのが適當であるこ云つて居る。但し或る僧庵では其時間を三時乃至五時の規程こして之を勵行する處もある。但し經驗者の一說には睡眠は連日靜坐し、日常の活動等を廢することであるから、平均より二―三時間を減じ、平均五時間位までなれば、何人も忍び得べしこ云ふのである。

以上、食物及び睡眠に關しては、殊更に粗食をなし、睡眠時間を短縮し、一種の生理的異常狀態に導きて、悟道の現象を起さしむるものではないこ云ふのが研究者の觀察である。次に場所は初入のものに於ては、なるべく靜所を可こするは、何れの經驗者も符節を合する如き事實である。是れ初步の修養者に於ては、意識の攪亂を除く必要上、靜所を可こするのである。たゞ百人中一二の例外者はあらう。かの坐禪せば四條五條の往來の人を深山木に見るこ云ふ類の人は之である。それ故通例、老樹森々こして塵寰に遠かり、周圍から來る印象が比較的神聖味を帶びたる山寺等を適當こし、其中でも其構內の比較的靜所に建てられた禪堂を適當こする。

修禪に要する手段こして先づ云ふべきは持定の坐法のことである。我國の禪宗に於て行はれる處の座法は「坐禪儀」に則る。それは臂下に座布團二枚位を敷き、上體を直立固定し、兩脚は結跏趺坐(甲)或ひは半跏趺座(乙)こ稱する位置をこる。成るべく體重を輕く支持し、早く疲勞するを防ぐ位置こなすのである。甲のこきは先づ右の足を以て左の足の上に安し、左足を以て右足の上に安ずる。乙の時は唯左の足を以て右足の上に置くのみである。之に寬く衣衫を繫け

て齊整ならしむ。次に右手は左足の上に置く。左掌は右掌の上に安す。兩手指の向ひたる合せ先きを臍に對にして置く。かく正身端座し、左に側ち右に傾き前に躬まり後に仰くことなからしむ。耳と肩と對し鼻と臍と對せしむ。舌は上顎に掛け唇齒相着け、目は開くもその度不張不微たること。鼻息微かに通じ、かく身相を整へて、深く長く靜かに呼吸さするのである。

このやうに靜坐を用ひ呼吸を調整し、精神の安定をはかり、學人(修禪者)をして特定の心意狀態を體得せしめ、其處に一種の覺悟を得せしめるのである。斯る心意の狀態に到達するには只管情念を靜穩に保つに勉め、機熟するに至つて、自然と覺證を得るに達するのであるが、單にそれだけでは、何時、覺證を攝むことが出來るか覺束ない。それは學人が倦怠のために挫折することがあるので、その心境に到る便法として心的支杖を與へ、これによつて學人をして目的の境域に進ましめんとする。然らばその心的支杖とは何ぞやと云へばそれは卽ち所謂「公案」である。公案とは宗綱を含み、至理に出でた深奥なる問題であつて、その問題は師家から辭句を以て、又は口頭を以て與へ、それを解決せしむる。たとへば、その問題は左の如きものである。

一、趙洲和尙ニ因ニ僧問フ、狗子ニ還テ有ニ佛性一也タ無シヤ。洲云ク無。

二、洞山和尙ニ因ニ僧問フ如何ナルカ是レ佛。山云ク麻三斤。

三、五祖曰ク、譬ヘバ如シ水牯牛過クルガ二窓櫺一頭角四蹄都テ過ギ了ル、甚麼ニ因テ尾カ也タ過クルヲ不レ得。

或ひは口頭にて

四、「太陽を持つてこい」と云はるゝ。

或ひはまた俗文で極めて不論理、變挺に聞ゆる問題も提出せらるゝと云ふ事だ。(通例我國にて用ひらるものは、多くは碧巖錄、從容錄等よりとり、最後に解決せしむる問題は臨濟の四料簡、洞山の五位及十重禁であると言ふのである。)

但しこの公案を、多く解すればとて、その道の進境の尺度を示すものではない。問題には難易あり、師僧は問題に段階を附し、容易なるより漸次困難なるものに進ましめ、而して最後の最難問を解決せしめるのである。此問題の解決は分別、卽ち理智に據らず、理論や說明を避け單に直觀する所を以て口頭又は其他を以て之に答へしめ、師僧が可とすれば、之を認め、然らざれば、幾回も反復せしめて、修練の後、應答の解決を求める。その問題や、その解決たる答の當

否の如きは、禪の心境に達せる體驗者にあらでは、素人の傍人が見ても之を解し得ないのである。而して答の當否に就ては、體驗者なれば、誰人も符節を合する如く之を判決する。

それで公案の解決には、理智を排するのであるが、通例吾人の備ふる理智は普通の理智と徹見後の理智と二つありて、後者は一名佛智と稱し、公案の解決は此後者によりて營まれる。蓋しこの佛智とは、卽ち悟道見性の體驗を經て、後に作用する理智作用及びその體驗に依りて得た智識であつて、その道の人は一に又道眼とも稱する。卽ち禪はかゝる精神狀態に於ける事柄であるから、概念不可傳と云つて、本人が體得し、直觀に俟つより外なきを本旨として居るのである。

されば斯る心境に達するには、容易に數日時の間に出來るものではなく、それ故參禪中には師家が禪堂に來たり「接待」と稱して、先人悟得の經驗を說示して、意識を醒覺せしめ、心意を轉じ、示唆を與え、或ひは一定時に、學人を一堂に集め、佛典の講義をしたりして、その道の見識を養ひ、練磨を加えしめる。もし學人が懶惰昏沈の際には、大喝を發し、或は棒打して策勵する。或る時には拂子を竪て又は棒を擧げて概念不可傳の玄旨を暗示する等の事をする。

其外「入室參禪」と稱し、特に師の室に入り自己の見解を提出して、師の判斷を乞ふ事があるが、此時にも容易に師の許しが出てず或は師の計畫にかゝりて苦しめられ、時として進退坐作を失ひ、茲に轉身の一路を發見したり、又轉身の一路なく放身捨命の已むなき場合抔に出逢ふと言ふのである。斯くして苦しむ處に塵俗に處し、右對左應離局を開破するの手段を修養したり或は從容生死の難關に處する勇氣をも養ふ事が出來るのである。

二　靜坐中に於ける身神の狀況

偖て坐禪中の精神狀態は、果して如何樣のものであるか。先づ前に身體の生理作用はと云へば數日乃至一二週、或はそれ以上、連續して前記の姿勢をなすのであるが、初めのうち、大多數は坐法に慣るゝ迄は膝關節、足部が甚しく苦痛を感ずる。が然かし元來、平安な姿勢なことであるから一二日にして習慣となつて苦痛を感ぜない。且つそれらの爲め、禪堂內に於ては、二時間目位に一回一同が行列して堂內あるひは堂外を約五六分間步行運動をさせる。

食事は前述したやうに、常食或ひは粗食の方ではあるが、然かし概して不足勝なるも、他の間食喫煙等をせないのであるから、大多數のものは、以前より食事を旨しと云ひ、別に味覺に

變りはない。

次に坐禪中の心的經過を云はんに、初め精神のやゝ靜穩となるを見て前記の公案の問題を提出せらるゝが、これに對し最初は理智によりて解決せんとするも、容易に解決が出來ず、興味は去り倦怠を來たして連續的能働的に働く意識に裂罅を生じ、斯くして心は受動的に東奔西走し、意馬心猿、底止する所を知らず、家を思ひ、友を思ひ、過去の經驗に想を走らせ、溪聲も松籟も耳に入り來り、聽くまいとすると、いよ〳〵皷膜の邊に、强き緊張を覺へたり、或ひは視覺の印像が、意識の中心を占領するなど、覺えず問題を忘れ、而して斯る觀念の奔逸が何等かの機會に妨礙せらるゝ時に、意識は再び問題の解決に戻るのである。

斯る觀念の流れを禪家では雜念妄想と云ふ。この雜念の生起するは、意識の性質上、普通の事であるが、之を妨止するのが肝要で、これに著るしき努力が必要とせられる。尤も普通、この雜念は公案に注意を集中すれば、別に雜念を禁ぜんとせずして雜念は起らぬやうになる（六一％）公案の提出は一は此目的の方便である。又雜念は防止せんとの努力を用ひず、聯想の進む儘にすれば、一定時の後にはそれは已む（一九％）、この外、此際に念佛をしたり殊に精神何物ぞと反省したり、或は雜念の內容を解釋せんとしたりして、其れでも已むものがある。甚しきは雜念妄想の起るとき、それが進行して極々稀には幻覺及び妄想を起す事さへあると云ふ。

公案の解釋に理智を用ひずして、解決せしむる所に禪の心理はあるのであるが、之を敎へられたるものは初めより理智に據らないものもあるが、大部分は、初めは理智を用ひて解決し得ず、其無用を悟りて後に專ら單に公案を念ずる事となる。但し禪の敎へに於ては理智をば惡智惡覺などと稱して之を排斥するのであるが、是れ禪の訓練上妨害になるとの考へから起つたものである。何故に斯うした考が起つたのかと云ふに、極簡單に云へば例へば吾人の觀念や概念や言語文字の起源に就て見るに、是れ皆便宜上の外界の符徵で、其甲の發表する符徵は、直ちに乙に甲の經驗を傳ふる所以でない。故に禪では言語や文字は人を迷ますものである。殊に言語や文字で傳へる事の出來ぬ樣な經驗を、一般性を持つた言語文字に當て箝めるが如きは其眞實を去ること遠きもので、徒らに人を迷はすものである。眞に其れが如何なるものであるかを知らんとしたならば、假定、想像を捨てゝ事實其物に卽着しなくてはならぬと說くのであから惡知惡覺と云ふのは一は此邊より出でたのであらう。

公案に幾日も注意を集中し、時には又師家の警策奬勵に鞭打せられて、注意を續くるときには忽然として無差別の心境に入る。これが禪的心境である。此狀態には初めは淺く、後には深く淺初、深後とも名くべき二狀態を區別し得るが、淺初の時は唯公案だけが意識に殘つて他に何もなく、後深の狀態に於ては其公案も何も殘留しなくなるのである。

淺初の際の實驗者の言に、此時には外部より來る色、音の刺戟を感知すれども、時には其色、音に同化し居るの狀態にあることあり、是れ公案の性質によりて此事あるなりと。又或者は曰く此狀態に於ては通俗に云ふ無意識の狀態と確に異なり、此時には心界昭々として只公案三昧なりなど云ふ。

後深の狀態に於ては公案も意識の中心より消失し、普通の觀念的經過は全く跡を絕ち、外界より入り來る感覺的印象は恰も明鏡に物像の映るが如くであるが、內面的には全く之に認識反應のなき狀態となる。是れは熟睡狀態でなく、熟睡狀態と異なる所は覺醒意識に立戻つた時に何等かの印象が殘る點にある。「普勸坐禪儀」に云ふ不思慮底の思量である。非思量である。禪家は之を稱して道と云ひ、佛と云ひ通俗的に之を正念と云ふ。今信仰的色彩を離れたる語を用ひて之を言はゞ靜張の狀態と名くべきであらう。靜は觀念的過程の行はるゝ狀態の動的なるに對して謂ひ、張とは何時でも觀念的過程に入り得る可能性を持つた、緊張した狀態であるからである。今斯る狀態を體驗した人々四十人の回答を見るに其七割迄は、此狀態を以て精神は活動しながら普通云ふ所の意識はない。卽ち無意識に似たもの、意識の一種なりと云ふのである。又或る者は單に意識の活動する丈のものでなく、多少の情調を隨伴する意識的活動である。而して此狀態に於ては注意は何等特別なる所に向けられて居らず、廣く分散されて居る。精神を刺戟するだけの刺戟あれば、心は容易に之に反應する。從つて精神は靜穩ではあるが動的であると云ふのである。

古書に類例を求むるとよく這般の狀況及經過を描寫せるものがあるから、重複ながら、左に擧ぐる。

『斯る念(雜念妄想)起るにもかまはず、いよ〳〵志を深くして退屈の心なく、ひたと坐禪する時は、坐禪の心ちと熟して、時として善念も起らず、惡念も起らず、かう〳〵としたる無記の心にてもなくして、其心すみ渡りてこぎたる鏡の如く、すみ渡れる水の如くなる心すこしの間

生ずるなり。これは坐禪の心、露ほど現はれたるものなり。かやうの事あらん時は、いよ〳〵す、みて坐禪すべし。ひたすおこたらず坐禪すれば、初めは暫くの時すめる心となりたるが漸次其心すみわたり、坐禪のうち三が一すむ事あり、或は三が二すむこともあり。或ははじめおはりすみ渡りて、善惡の念も起らず、無記の心にもならず、はれわたる秋の如くさぎたる鏡を臺に載せたる如く心虛にひとしくして法界胸のうちにあるが如く覺へて、其胸の內のすゞしき事、たとへて云ふべきやうもなくおぼゆることあり。云々』

靜張狀態に於ける生理現象は如何にと云ふに、肺臟の運動が非常に緩漫で、聽診器を以てして、呼吸音が聽き得ざる位ひになる。但し腹部は緊張して、絕大なる力が這入つてゐるのを認める。古來、こうした際には、鼻の先きの羽毛が動かぬなど、又は口と鼻とに栓をかひて二三時間放棄せられても、何等の異常もなき僧もあつた。恰かも他の動物の冬眠に似たる狀態になつたのである。脈搏はどうやうになるかは、文獻の徵すべきはないが、循環器は極めて穩隱になるといふことである。然らばこの靜張の狀態は果して何物であるか。日常經驗に現出する要素を以て說明し得るかどうか。或は曰く一種の感情で以て、感情の着色を除きたる如きものではないかとの說がある。それらについての委細は暫らく問題として、茲には之を略する。

三　不滅の觀念と、禪に於ける靜張狀態と催眠現象との比較

斯くの如き狀態に於て、自個卽ち自性なるものは何であるかと觀れば、相對を絕してゐるのであるから、生でもなければ、さりとて死でもなく、まさしく不生不滅なるものであると信ずるのである。生滅變遷極りなき現象界に於て、獨りこの變遷の相に與からぬものは此道であると信ずるのである。此眞如は、宇宙に遍在するもので、然かもその一部分は、人々各自の內にも潛在せるものであると信ずる。

然かし之は、單に一の哲學として說くのみに止らないで、實驗により、學人をして、身親しく之を證せしむるのであるから、體驗者に取つては永久不滅の實在である。此光明は從本無所住、諸佛出生すれども出世せず、涅槃すれども涅槃せず。汝が生るとき光明生ぜず、汝が死するとき光明滅せず、佛によつても增さず、衆生にあつても減ぜず、方處もなければ相名もある

こゝなし。是れ森羅萬象の全體であるこする。

催眠狀態に於ては前に述べた如く、種々の段階があり、知覺聯想、思考、判斷、慾望意志等の心的作用は休止して自分は何處に居るやら辯別がない。併し身體內から生ずる有機感覺や、視聽覺より受容する感覺の殘存するやうな狀態がある。此等の狀態は、禪の所謂無念無想の狀態こ全く同一の樣であるが、全體こして心的態度が異なる。禪の無念無想の狀態では精神的傾向が能動的態度にあるに反して、催眠狀態では受動的態度である。卽ち禪に於ては身心を擧げて公案に全力を集中して到れる狀態で、種々の刺戟あるも容易に受容しない。物に動せず轉せずの傾きがある。然るに若し觀念過程を呼び起す丈の刺戟があれば、意識は醒覺し而して統覺的活動は連絡的に行はれて決して部分的に活動する事がない。つまり靜張の狀態に於ては活動し初めたならば普通の意識過程であつて全體的に作用する。然るに催眠狀態に於ては受動的であるために容易に暗示を感受する。施術者の欲するが儘に被術者の心裡に各種の觀念を起さしむる事が出來る。從つて神經系の知覺官感器關に各種の幻覺錯覺を起さしむる事が出來る。此暗示催眠狀態中は勿論の事、又催眠より醒めたる後も、意識の一部は眠つておるに一部分は活動し卽ち部分的に活動するを見るのである。兩者の間に斯うした差異がある。從つてこゝに兩者の心的態度が窺れよう。

四　悟道に要する諸件

悟道に要する時日は前記の如く專念に工夫する場合に於ては、一間の通過するまでには早きものは二三日より遲きものは三十日、大多數は平均二三週間を以て足れりこしておる。其他正確に修業せず、只日常念頭を離さず、間歇的に工夫するものにありては一年乃至數年位で、確證の機を得べく甚だ不定である。而して初入の脩練の如く專心ならざるも、一たび自信を得たならば、其れの愈確實なる爲めには一年半乃至三年の脩練を要し、其圓熟の機に達するには五年乃至十年を要するこしてをる。

本人の智識程度に關しては、高等常識を具ふるを要する。（約中學程度以上）全く無學なるものに於ては、他力的に導かるゝに適して禪には適せないこ云はれる。そして有識者の學問の深淺に關しては、智識の深きは悟入に邪魔をなすも、悟得後は却つて有利なるものこせらるゝが、是れ與ふる所の問題公案なものが日常の經驗の一般には學問の深淺に關係なしこせらるゝが、是れ與ふる所の問題公案なものが日常の經驗の

それと性質を異にするからである。

智識內容の豐富なるものは、公案の解決に動もせば推理や想像に訴ふる故に之がために苦るしむ。然かしながら知情意の發達せるものに於ては、日常の些事にして一般に看過せられ易きことの中にも眞理を認め、價値を見出すことがあるやうに、一旦禪的經驗を翫味し、其信仰を把握せるものに於ては、之を應用する場合には、智識の豐かなるが有利であることせられる。

年齡に關しては、あまり幼稚なる者及び老耄者を除き、二十二才より四五十代を可とする。卽ち或者は中學卒業以上の年齡で、人生觀、宇宙觀に就て疑ひを抱く頃からでなければならぬとし、或者は三十以上血氣壯となり世の經驗を知り分別はつけども、未だ落附きが足らぬと云ふ時期を適當なりとなし、或は又脩練の結果から考えて、從來の素朴的なる信仰が智識經驗集積の結果、其力を失ふに到り疑問と不安との生起せる時分の年齡を以て最も適當なるものとしておる。

性に就ては、男子を適せりと云ひ、又性には關係なしとするものあるも、大體に於て性は脩禪の適不適に關係する所が尠ないやうである。

職業及び動機について觀れば、素と禪は宗教信仰に關することであるから、何の職業者及び何人たるを問はず、宗教家側よりすれば、其好來を需め之に歸依せしめ得べきものとしておるが、併し其適用者の智識に關しては、中等程度以上の智識あるを要するは前述ぶる通りであるとして、試みに今入谷氏が任意に發問せる脩禪の應問者四十人に就いて其職業別を見るに、僧侶三五、〇％　醫師一七、五％　教育者二〇、〇％　官吏一五、〇％　商人七、五％　無職者七、五％　學者五、〇％　學生五、〇％　軍人二、五％　家扶二、五％　辯護士二、五％　工業家二、五％　農業二、五％の割合である。卽ち如何なる職業に附隨して內面的要求の多きやの程度が推察せらる。僧侶は職業柄多數なるは勿論で次に醫師の多きは職業上目のあたり人生の悲慘事を目擊せるより生ずる反省と、一は多數人の生命に關する重大な職業なるが爲めである。教育者は多數の人々を教育するてふ自覺に伴ふ向上心の影響が大に關係ありと察せらる。其他軍人や官吏なども自他の生命等を取扱ふ關係より多いものと察せらる。

更らに今此等參禪上の動機を見るに內面の要求から來り、或は外的機緣に促がさるる等、單

復一樣でないが、多數のものは人の想像し得る如く、自他の死や疾病の恐怖、悲慘なる境遇に於ける不安苦悶せり安心を求めんとするが(求安心)最も多く、其數全應問者の三分の一以上を占めた。爾餘のものは種々の動機に分たる。宗教家自身が自己は何ぞやの自覺より禪に入るは別として、僧侶ならざるものに於ても此考より禪に入るもあれば、或は聖賢の書を讀み凡愚の域を脱せざるは心の迷妄を破除する能はざるに因ると考へ、聖賢の域に進まんとの向上心より起るもあれば、或は武士たるものは禪をやるべし、武田流の奥義と禪は一致するものなど教へられ其利用上これに入るもあれば、或は脩練者と大人物と關係ありとする教へに誘引されてこれに入る等種々である。要する所諸般の煩悶苦痛より安心を求め、或は自己を向上せしめ、以て自他の存在を幸福ならしめようとするのである。人の斯した要求は脩禪宜しきを得れば其れ〳〵充てられて好結果を獲得するのである。其次第は次章を見れば明になるであらう。

五　獲信後の修練及び其結果

悟道は專念脩行の結果比較的卒然と出來るやうである。そこで大乘頓悟の脩行をなし一超して如來地に直入する抔と迄云はれておるが、一旦悟つたならば重ねて修業する必要あるかと云ふに、何事も同じことで、悟りの心境は其程度に於ても質に於ても之を進めるには修練が必要とせられておる。其程度と云ふのは不完全なる靜張狀態を完全なものにするのである。又悟りの質とは平等觀を經て其れから差別觀に入ることの事である。

偖て斯くして修養せる學人の世界觀なるものは果して如何なるものか。即ち禪的世界觀は果して如何。即ち差別を離れて平等觀の立場から觀た世界が所謂禪的世界觀である。觀念概念の拘束を離れて眺めた世界が禪的世界觀である。概念的觀念的手段を借りないで、直下に事物の眞相を直觀したる所が禪の世界觀である。

六　悟道練習後の本人の性格に對する影響

既にあらゆる智識思想を絶滅して、絶對平等不變不滅の眞如に到着し、身親ら眞如となり佛となる以上は其人の性格の上に大なる變化が伴ふべき筈のものである。所謂文字通りの心機一轉のあつた以上は、人生及び自然に對する考も亦大に變つて來るべき筈である。こは獨り禪の修業者に於てのみならず、一般に宗教的覺者には斯る著しき變化が伴はねばならぬものである。心的再生がなくてはならぬ。個人性と云ふものは改造せらるべき筈のものである。スター

バックは回信後の心的經驗を說明して、回信後に起る最も普通なる心的經驗は清新の感しである。經驗者は今や舊世界と絕緣して一の新しい世界に生れて居るのである。古い諸經驗を別な眼から眺めて居るのである。斯る經驗者には此世界が一新生面を有ち、新しい內容を持ち、新しい意義を有するものであると云つて居るが、實際は然るべきものと思はる。とにかく從來の性格が存在を失ふ位、或は其背後に退いて獲信に依つて認得した自己と云ふものが、全ての經驗に際して顧慮參照の中心點となるべき筈である。利己的な多くの缺點を附着せる舊生活が最早頭を擧げない迄に、新しい自己と云ふものの存立が充分深く印刻せられて、新しい自己から凡ての諸動機を規定して行く樣な習慣が形成せられて行くべきである。

（一）智的方面に於ける影響　その第一は意識の流れが快暢になる。その理由は、禪は元來、智性を放棄して、絕對の境域に至らしむるのは一つの方便で、吾々が一たび靜張の狀態から出づれば社會に生存せる以上、矢張り觀念や判斷の意識作用を働かせ、考ふべきことは考へ、意志すべきことは意志して行かねばならぬ。若し智性を働かしむるが禪の理想と相反するものならば禪修行は無用な、否有害なものとなる。人間は觀念概念の籠に束縛せられて心の自由を失ひ、其れが爲め惱める人々をして、一たび斯る籠と絕緣せしめ斯る拘束を離斷せしめて、人間精神の根底には斯かる縛者の存在しないことを實感せしむるの方便の修業であるから、感情的な觀念の誘起することありとも意識の流れは極めて快暢に持續する。例へば人として氣質により又事柄により程度に厚薄あれど日常煩悶、厭世、不快の經驗の起らぬことはない。禪にはかかる經驗の爲めに其自由を奪はれない、隨所に人をして主となることを得せしむるものがある。これと同意味に執着心は減退するのである。

次ぎに、智的作業に於ては、公案に苦しんだ結果、思慮が周密になり、且つ機能の度を增すのは大多數然りである。四十一人中唯一人が銳敏の度が減じたといふのみで、それは恐らく特別の事情によつたのであらう。其他の凡ては石火の機と云つて、智慮を廻らすことが敏速に、要點を捉ふること早く、且つ思慮が周密になると云ふ。但し此有樣は本人生來の性質に變化を起したといふよりは、觀念的過程が不快感情のために妨げられず、二次性に起つた結果であると見做すべきである。

（二）感情的方面の變化　その一は恐怖心の減退である。この恐怖は人々の素質經驗に

よりて程度は異るも、禪の修養は文字通り、生死透脫の修業であるから、こもかく其恐怖心が減じ、物に應じ事に處して恐れず、よく修練せるものは大盤石の如き安心を以て事に臨むことが出來るのである。此の種の心的訓練は、畢竟、專心公案に注意を集中する習慣から來るもので、その訓練中は、一部は前に述べたやうに放身捨命とか、喪心失命とか、懸崖撒手絕後再蘇とか斯る危機を嘗めたる結果である。

例へば、よく人の話柄に上ることであるが、勝海舟が京都に在つたとき、暗殺者が銃を以て狙ひ、今にも火蓋を切らうとした時、海舟はこれを知つて少しも騷がず、件の武士の方に向ひ「狙ひがまるで外れてゐる。それでは俺の身體は打てぬ」と云つたので武士が避易して逃遁したと云ふことがある。これなどは生死の間に處して大盤石の如く、石火の間に智慮を廻はす禪的修練の結果と云はねばならぬ。又、山崎宗鑑の辭世に「宗鑑は何處へと人の問ふあらば、チト用ありて彼の世へと云へ」と云ふのがある。誠に生死を度外視した る消息である。

禪者はどうして、斯く恐怖心を減ずるかと云ふに、臍下丹田に勢力を注ぐがために、それが習慣となり、そのため恐怖心が對抗減退せられ、意識動搖の混亂が防止せられるためであると云はれる。是れ大ひに注意すべき事である。

次に自我は擴大する。禪によりては第一に利己的な小我を捨てゝ、宇宙の大自我と冥合する習慣を得るのが主たる原因で、更に意識の過程が凝滯せられずして流動するから、憎惡怨恨の特質たる排他的傾向の現出せざるなどは、又その一理由である。或ひは又公案の修行で矛盾を是認する等の點からも出づるのである。かくして自我は擴大し、度量は大きくなつて、融通が利き、客觀化することが多いから、從つて所謂「人物が出來る」のであらう。

それから同情的愛他的傾向が進展する。人間は社交的のものであるから、或程度までは何人も他愛的傾向を有するが、自我が擴大すると、それに連れて、他を容るゝことが一層容易となる。然かも本人は獲信によりて、理想的の存在を認め、或ひは之との交通を感得して居るのであるから、一層その傾向がよく行はれるやうになる。且つかゝる人は獲信の際の歡喜渴仰の氣分を失はずして、人に接し物に應ずるから、同情他愛の心は一層深くなるのである。更に、禪者には樂天的傾向が一般に現はれる。これ舊生活を脫して、新なる生涯から世の中を眺むるの

で、世界が麗しく淨化して見へ、又不安苦悶怨恨等の不快感情が消滅する爲め、意識は常に快調を帶びて來るからである。故に禪者には厭世の傾向を帶びた人は稀である。應問の禪者四十人中七割五分位迄はこうした心意の變調を認め、其主なるは快活、暢氣、沈着、洒落、平安、氣輕、安穩等である。其何れも熱情的でなく、平靜な快感を伴ふ氣分である。

（三）意志的方面　前に述べたところは、おもに禪者の主觀的價値の方面に限つたのであるが、若し禪は單に主觀的方面の滿足に限られ、無念無想を事として、只之れにのみ執着したならば、それは小乘的利己的で所謂死禪と云はねばならぬ。禪は對他的なる意志的方面に大切なる影響を起すので小は自家人格の向上より、大は社會文化の發展に寄與をなすのである。禪者の意志行爲は如何になるかと云ふに、知行不離なる所に、仕事三昧と云ふ所に大なる價値があり修養者には其うした有利なる習癖が生じてくる。この知行不離と云ふのは思つて行ふ所と些の間隙はない。精神と肉體とは極めて緊密して、精神其物が完全に行爲に現はるのである。例へば本を讀む時、字を書く時、百姓をする時には心は筆や本や鍬鎌其物になりきつて活動し、此時には主客の區別を超越し、渾然たる心物一如の活動をなすのである。此が卽ち所謂三昧の態度となるのである。こうした行爲は全自己を擧げて一心不亂に行ふのであるから、驚くべき精確、巧妙、特長を現はし或は神祕非常と思はるゝ行さえも生ずる。劍術忍術の奧儀など此後者に屬するものと見做してよい。行爲にかゝる傾向の生ずるのは畢竟、公案修練の際の心機習慣に出づるのである。公案の發表には前云ひし如く、感得せる所のものを分析せず說明せず批評せずして如實に發表するを本旨とするが故に、發表する所のものは、獨り言語に限らず、貌言、單一なる音調、奇矯なる言動さえなきが十分の價値あるもので、斯の如くにして禪の修養に於ては精神の動的方面が徹底的に重んぜられ、其れが習慣となりて、知行不離或は或る意味に於て知行一致となるのである。

尙茲に並列して述ぶべきは禪者に於ては、修養の結果意志が强固となるの外、意志行爲の間斷なき順應、他の言を以て云へば事に臨んで行爲の油斷なき事である。これが見道がす可らざる大切なる事である。意志の强固となるは際限なく公案を工夫し、百折挫まず其解決に達する迄努力する等にて、大に其の强固性を養ひ得るのであるが、さて次ぎの油斷なく働くと云ふに就ては、獨り狹義の意志其物の作用のみではなく、云はゞ注意作用が與つて大に力があるので

ある。禪に於ては精神が無念無想の靜張狀態になれる時、一たび活動を始めたならば外界の刺戟何事に依らず電光石火の如くに反應して、順應的の行爲をなすに至るのである。其れ故に禪の敎に於ては常に心のすきまなきを敎え「暫時もあらざれば死人に如同し」と云つて油斷を戒めてをる。これが一語千萬鈞の重さある敎であつて、現に物に應じ變に應じて突嗟瞬間に善處するを得るのは、精神が間斷なく多少度に緊張し、注意の念が寸毫も失はれざる習慣より出るのであつて、此呼吸は平常の行ひ萬事につけ之を修養せねばならぬ。

七　身體的影響

禪は精神の病を醫するのが其本領で、之れに關する身體的の影響を說きたるものは、古來文獻に甚だ乏しく、精確なる事實を知るには今後の研究を要するこせられてをるが、今研究者入谷氏によるに、三十九人中二八人(七一%)が健康は增進し、殘り二十九%は健康不變或は結果不明こせられてをる。健康增進の方は、大多數は單に漠然こ云はれてをるのであるが具體例を見るに一二のものは身體が活動的になれり或は身體の擧措規則正しくなれりこ答へ、又ある者は修禪後に數年月間羸瘦の身體が强健こなり、若年時腦の充血や足の冷ゆるのが治して無事に高齡になつたこ云ふのもある。蓋し座禪の直接の結果こしては、深呼吸や下腹部に力を入るゝここにより、又生活法の規則正しくなる所より其れ〴〵血行等に利益あるは考へ得べく、間接に精神が何時でも平安、快性氣分こなるから、これが血行や其他物質交換に大なる利益を與へ、健康を增進するものあるは理論上又事實上より見て一般に疑ふべからざる所である。

八　禪の弊害

誰れ人も修禪すれば玲瓏珠の如き人格を鍛へ上る事が出來るものこ信ずるは早計である。何事も極端に走れば弊害を起し或は社會生活の妨害こなる樣な事になる。今禪病こも名くべきものを擧ぐれば

(一)　禪の修行は理智を排除するの故を以て遂に誤つて理智の權威を侮蔑し、奇矯の言句を弄し、思想行動常規を脫逸するを以て禪の要領に適ふが如く考ふるに至る。

(二)　禪に於ては自己を以て佛なりこ信ずるが故に、殊更に唯我獨尊の風を養成し唯自分天狗こなり社會の進步に伴ふここを敢てせざるが如き陋習に陷る。

(三)　或は禪は慾望を絕滅するにありこ信じて、極端をる禁慾を行ひ、無念無想無慾恬淡な

るを欲し靜座瞑目これ事とし、只管現世を嫌忌するが如きも亦其一である。

(四) 又事物に冷々淡々たる心意狀態を養ひたる爲めに、折角起り來たる慾望も其動機微弱にして事に志すも遂に一定の目的を完成するを得ざることである。是れ注意すべき弊の一つである。

(五) 時としては禪に依りて變り物を作る如きこともある。然しその變り物の多くは、禪の結果にあらずして、變り物が禪を修するが故に、一層變物となり了するのではあるまいか。恐らくその個人的素質が大なる關係をなすものであらう。これまた注意すべきである。

禪の事實短評

以上は禪の事實である。これによりて一々の心理的過程が可なり明白になり得たと信ずる。而して尙一は、人の容易に考へ得る如く、宗教は諸般の煩悶及び心的苦痛より解脫して、安心立命の信仰を得せしむるが其使命で、卽ち誰れ人にも共通なる一種の廣き意味の精神療法と見做し得るからである。現に一部の人は、宗教は宛かも心の疾める人のモルヒネの如しと云つたが、此言は予の考ふる精神療法的の意義を徹底的に言ひ現せるものである。

宗教の一般論は別問題として略し、今單に禪の事實を精神療法學的に見るに、其特定の坐法や、雜念妄想を去り、進んでは觀念概念等一切の理智を排し、所謂無我無想の靜張狀態に達し其れから自我の徹見を得、而して一種特有の世界觀を得る所、及び傍ら種々の心的演習をなす所より、性情の變更を來し、智に於ては流暢、緻密、情に於ては自我の擴大、樂天、他愛、不執着、行爲に於ては知行不離、不油斷等の傾向を來たし、又時として之に伴ふ諸弊害も生ずるのであるが、凡て此等の操作及び結果現象は、精神療法家にとりては、他山の石として一々參照になり、又一の標準になる事柄である。

今是れ迄見たる精神療法の諸式と、禪の事實との比較二三を擧ぐれば左の如くになる。

(一)醫師が患者の煩悶を去り安心を得るには、病症に應じ、病理上よりする至理なる事實の說得法や、暗示法や、精神葛藤の分析法や、種々錯多の具體法によるのであるが、其れが禪に於ては、自我の徹見や、宇宙の絕對心に冥合する事や、或は如來地に到達すると云ふ樣な、誰れ人にも一樣なる極めて普遍的な方法の關係となつて來るのである。但し其處が宗教の本性だが、若し種々なる醫的具體的精神療法に效がなければ

矢張り此普遍的精神療法の力を籍らねばならぬことになるであらう。(二)其れから技術的に作爲せる精神狀態に就て見るに、精神分析法は所謂下意識にある潛伏觀念を擊掘して精神を淸淨にするにあるが、此精神を淸淨ならしむる點は、禪の雜念妄想を去り從來の理智を排し、一切の經驗を脫却せる靜張の狀態と類似がある。併し唯類似であつて同一ではない。(三)又催眠術の催眠狀態に於ては、無念無想になる所は、外觀上禪狀態に類するも、該條下に述べたる如く、兩者の精神狀態の態度がちがふ。禪の靜張狀態は積極性で催眠狀態は消極性である。(四)又禪的修養の結果の一條中で、知行不離、知合一致となると云ふ事があるが、それはツボアの說得法なぞでも、患者に至理を說得するなれば、知つて行はれざるなく、矢張り知行一致、或は一層高く知意一致 Tugend ist Wissen と云ふ事を、其治療的教育の教理及び事實として述べて居るが、彼此相似たるものがある。(五)其他諸般の實例に就て見るなれば、森田氏の精神療法は、患者をして言葉に依らず、體得を以て信念を起さしめんとせる事、或は屢々患者を捨身の狀態に置きて、例へば强迫觀念を治癒した事、或は豫期感動の如き、心理上妨害的恐怖的なるものより解脫して、安穩不關とならしむる如き、其他仕事三昧の觀念の如き等、多分に禪的原則の基礎と同じきを見る。其他諸多の精神療法家が、腹式呼吸なり練膽術等と稱するものは、皆禪の膽下丹田坐法、或は呼吸を調整する等の方式より誘導された觀がある。

個樣に禪の作法及び其修養は、精神療法の參考になる事が多いが、さればとて予は現在の禪の作法其儘が、直ちに諸般の疾病の精神療法になると云ふのではないが、兎に角、禪の事柄は東洋佛敎國に瀰蔓せる大事實であり、其研究事項も極めて廣汎且つ深遠である樣であるから、心理研究の專門家は云ふ迄もなく精神療法家にとりても參照研究の價値大なるものがあらう。

第三編　應用方法

精神療法の適應する疾患

前編には精神療法を分類して、一々その如何なるものであるかについての原手段を擧示した。これより以下に於ては、其療法は主として如何なる場合に用ひらるべきものであるか。而してまたそれらの手段は、如何に組み合はして用ふべきか、又、用ひられつゝあるかの實地應用に就ての概略を述べることにする。

但しこゝに謂ふ實地なるものは、到底、冊子に於て敎ふべきではなく、敎へんとしても敎へ得ざるものである。其は一に技術者の見識と手段に俟たなければならぬからである。さらばこの章に於ては、如何なる性質の疾病及び症候が精神療法によつて治し得べきであるか、尠くとも全治し能はずとも雖も、如何なる場合に須要であるかと云ふについて、極めて簡單に寧ろ大摑

みに概說するに止める。云ふまでもなく如何なる疾病と雖も、常に精神療法の應用とは關係がある。唯その症狀や性質によつてその効力が多少なるの相違を來すは他の理化學的療法と同じである。今、その中で如何なる疾病及症候が主として精神療法によりて治し得べきやを考ふるに、何人も粗大なる解剖的變化を有する疾病、たとへば腦の出血、病竈或軟化竈あれば、精神治療的方法によりて之を除くことが出來ることは思はないであらう。是れ固より至當の見解である。然し乍ら機能障礙であり神經細胞の極めて微細なる變化に基いて起る症候は、精神影響により神經中樞を興奮し以て去らしめることが出來る。即ち中樞器の種々なる刺戟症候、或は制止症候として來る痙攣、麻痺、感覺の過敏乃至脫失等、又は血行障礙には有効である。又精神影響若しくは自家暗示のために永く持續する症候例へば起立不能、步行不能なりとの意志より起るもの、疼痛を恐怖するより起る疼痛等には精神療法を應用すべきである。次に精神作用で身體症候の來るもの、たとへば神經性消化不良の如きは精神療法で治することが出來る。それから精神作用で起る精神病及精神症候は皆これによつて治し得るものである。

但し茲に注意すべきは、人若し輕卒に考ふるなれば、器質的疾患が精神療法で治癒せないのは至當であるが、たゞ精神作用で起つた精神障礙こそ精神療法で治ほり得ると云ふであらう。然しそれは輕卒なる判斷であつて、精神的誘因で發する精神症候は獨り純粹に精神的に止らず或は器質障害を起し、或は其人の素質により、または不明の原因で症候の成立が錯雜となり、到底精神療法のみでは治し得ざる場合が多々存するのである。是れ多くの精神病者が單に精神療法のみで治し得ざる事實を生ずる所以である。

以上を總括すれば、精神療法で主として治癒し得べき疾病及症候は左の各項に當るものと見てよろしからう。

一、機能性障礙に關する機能病及其症候。

二、器質障礙は恢復するとも精神影響によりて機能の恢復せざるとき。

三、精神影響で起つた身體的症候及び身體的疾患。

四、精神影響で起れる精神障礙及び精神的症候。

次に疾病そのものは治し得ざるも然も患者の希望や元氣を維持し、身體機能を調整するために、殊に精神療法の必要なるは

五、慢性特に不治性慢性疾患及び險悪なる急性疾患。

今日まで精神療法で處置せられた疾病及症候に關する經驗は實に無數であつて、殆んど各器關の疾病に亘つてゐるが、茲には前記の性質の疾病及び症候に關する精神療法の一班を擧げるに止める。

一　神經系諸疾患

神經衰弱　神經衰弱やヒステリー、外傷的官能病、諸多の强迫觀念等は精神的手段により て治癒するより外に道がないと云はれるやうになつたのは晩近の趨勢である。神經衰弱にありては發病の原因乃至は症候を增惡する凡ての精神的原因を除き、時としては隔離或は轉地療法を行ひ、それから生活の調節と患者の精神を鼓舞し又は指導し、ヅボア氏の據證說得療法等を行ふ一般療法の外、個々の療法に關しては、强迫觀念、憂鬱狀態は暗示療法其他の好題目となる。ヒポコンドリー思想、又妄想等も然りである。それから頭痛、背痛、四肢疼痛等の感覺障礙、神經性の心臟衰弱や消化不良または膽障礙、生殖器の官能的障礙は覺醒暗示の方法或は說得療法で効を來し得る。（各特殊療法條下を見よ）

ヒステリー　精神療法がその主要なるものである。一般精神療法としては病狀の說明當を得、且つ生活法を調節し精神を指導するは勿論であるが、特殊療法としては從來の周圍より患者を隔離する。卽ち入院、或は轉地等をなさしむ。ヒステリーは多くの場合、家事上の關係が有害なる精神上の影響をなしてゐるのであるから、多少の害を伴ふとも其周圍から隔離するがよい。周圍の人の配慮や同情が過ぐるも不可なれば、看護の等閑、若しくは疎暴に失するもいけない。此等の事情も考慮し隔離し自制力を養はしむべきである。而して症候を撲滅するには暗示療法が好適である。取分け「ヒステリー」は暗示性の高まつたものだからである。卽ち覺醒時に於ける單純なる言語的暗示、卽ち現在せる所の障害の除去したこと、不可能と思つてゐる運動の命令等、皆効を奏する。又一二の症狀には言語よりも假面暗示が偉效を示すときもある。時としては偶然的に或は偶然の藥物其他の治方で苦もなく全治するときもある。「ヒステリー」には催眠暗示がよいと云はれてゐるが、必ずしも決してさうではない。むしろ催眠術には困難な場合がある、殊に重症者にはそれは適しない。然し催眠暗示のよい場合もある。

「ヒステリー」の個々の症狀について精神療法の効果あるは(1)痙攣發作(2)疼痛(3)麻痺狀態である。

(1)の痙攣發作は多く感情の激昂に關聯して來るものであるから、一切の激情的刺戟を避け發作の輕易なるものは患者を鼓舞說諭し意思の努力を以て抑制せしめる。發作の原因不明なるか其他の場合には暗示療法を行ふを可とする。勿論催眠暗示だけではなく假面暗示の二三型を試むるも可。又、慰藉、時としては威嚇脅威を與ふる感動療法を試むるもよい。それからこの痙攣發作の患者は、癲癇患者等とは異なり、全然意識を消滅するものではなく多少は必ず意識は存して居り、且此際被暗示性をも保存しておるを以て、傍人はうつかりとせる言動をしてはならぬ。

(2)の疼痛も亦周圍の關係に影響せられることが多い。患者の疼痛を見て同情のために嘆聲をあげ焦慮するが如きは暗示的に害果を惹起するものである。これに反し適當なる慰諭的說話により疼痛の緩解すべきを勸告し、或は心機を轉換せしむる措置は甚だ有益である。假面暗示も効があるが、機宜に適し、耐忍を以て行はなければならぬ。電氣、塗擦、罨法、芥子泥、有效藥の小量の內服、無害藥の皮下注射等を行ふもよく、溫浴療法も効がある。然し此等も患者の信ずるものを選擇してなすを可とするは云ふまでもない。

(3)麻痺は一回の精神療法により忽ちに効を奏し持續的に治癒することもあるが、常にこうした事は期待し得ない。通例、麻痺は徐々に除くを可とする。又、電氣療法「マッサージ」などが麻痺を恢復するの有力手段であるとの觀念を患者が抱いてゐる場合には、此れ等の方法が其他の原因と相合して患者に活潑なる運動觀念を喚起することもある。次に「ヒステリー」から來る運動麻痺は通例完全性ではなく幾分運動し得るの餘力を有つてゐるのであるから、此性質を利用し運動の練習をなさしめるがよい。また之に催眠術を施すは忍耐を要し、一回の施術で治癒するが如きは除外例に屬する。

外傷性官能的神經病　何物かに衝突し、または打撲等の災害が原因となつて起る機能的神經病で、目に見ゆる創傷は是れなきか全く意義のなきものである。その症狀は神經衰弱又はヒステリーの如く、或は兩者合併せるに等しい。故に之に對する精神療法は前記二病の場合の原則を應用すべきである。ストルユンベル、ベルンスタインは、其疼痛は自家暗示によりて起

り或は些細な感覺を懸念するから起るこも云つた。更に此疾患に於ては、治機が十分に熟したこ認めたならば、些細な症候は殘つて居ても全治を宣告するのが必要である。そうするこ其些細な、頑固なる、ごふする事も出來ぬ訴が次第々々こ消滅する。

其他の官能的神經病及神經症候。(1)癲癇。暗示により一時性には發作を減じ又減ずるここは出來るが、全癒せしめるは例外である。(2)舞踏病。精神療法で好成績をあげるここが出來る。其効は獨り「ヒステリー」に近似せるものに限らず、かの傳染原因又は恐怖感によりて起る小舞踏病にも効がある。(3)局所性筋痙攣。管に「ヒステリー」性原因のものに限らず、顏面痙攣、神經痙攣、上下肢痙攣、其他筋間代痙攣に於ても効果を擧げるここが出來る。電氣をかけるこか、芥子を塗るこかの假面暗示の方法でも、しば〳〵奏効する(4)訥吃。談話不可能ここの觀念を抱くより起れるものには暗示により治癒矯正し、また防禦するここは出來る。ウエッテル、ストランドは、訥吃者を睡遊狀態に移行するここによりて直ちに流暢に談話し得るものありし例を報告した。而して全被術者の三〇、〇%治癒、四〇、〇%大輕快なりしこ。(5)筆書痙攣もベルンハイムによれば、「マッサージ」を加へた催眠暗示で良効を擧げ得るこ云ふ。

神經痛及頭痛　神經痛其他の有痛疾患で精神療法が偉効を示すのは(一)ヒステリー性又は神經衰弱性或は貧血性原因の神經痛。(二)痼疾的なる「リユマチス」性疾患に關係ある神經痛。(三)原因不明なるも恐らくは脈管運動障礙に關係ある神經痛(脈管障礙の發作性に反覆するこ同時に來るもの)。由來、神經痛は疼痛觀念による自家暗示の作用で起り、然らざるも他の有痛疾患の回想、其他一般の憂慮恐怖を起す觀念の喚起、及び精神の過勞は神經痛の發作を助長するものであるから一般療法こしては仕事又は適當なる鬱散法を與え有害なる感情及觀念の喚起を豫防するを要す。次に水治法、「マッサージ」、無害劑の內服、電氣等も假面暗示こなつて有效に働く。催眠術治療を賞用する人もあるけれごも、單に假面暗示により治し得るのであるから必ずしも推賞すべきではない。然し他の治療法を以てしては效なき慢性神經痛、若しくは痼疾神經痛には奏效するここあるを以て、これを試みるも不可ではない。それから頭痛、特に神經衰弱及「ヒステリー」に來るもの、原因不明の常習頭痛は精神療法に適する。催眠術は他の理學的なる假面暗示療法例へば電氣、酒精毷法等を試みて效なき後、初めてこれを行ふを可こする。

不眠症　無數の患者は或場合に屢々不眠に困るが、先づ神經質者の不眠について云へば神經質者の多くは不眠を訴へるが、その割に身體的に衰弱せないのは、患者は不眠だとは云つてゐるが、實は相當時間は睡眠してゐるので、たゞ主觀的に不眠の如く感じてゐるのである。若しも連夜不眠に惱み、睡眠時幻視を生ずるやうな人には、その患者により一樣ではないが、通例、精神上の害因を避けるために精神上の仕事をさせるがよい。仕事と云つても困難なものではなく感動を惹かぬものでなければならず、且つその間に適宜休息或は體操運動をなさしむ。稀れには十分なる休息、若しくは身體運動を命ずることもある。不眠の重症なるものには精神に一定の指導を與へるの外、就寢後、靜かに自分の吸氣を數へしむるもよい。或は又靜かに深呼吸をなさしめて成功することもある。或は雜念が次から次へと生じて來て眠り得ざる時は、暫らく開眼を强ひ、天井を凝視せしめると却つて雜念を消退し睡眠を促すこともある。而してこの際には、目を開き終夜決して眠らざるべく努力するの態度及び決心をなすときには却つてよく睡眠する傾きがある。又如何にしても睡眠し得ざるときは、寧ろ起床し一心に難解の書等を讀ましむると眞の疲勞が來て睡眠を來すこともある。對症的精神療法としては言語または假面暗示を應用する。患者に「睡眠不可能」との自家暗示の觀念强くして不眠であるものには一回は眞の催眠劑を投じて睡眠を得さしめ、然る後假面暗示其他の攝養法を以て治療を持續する。催眠術は神經衰弱性の不眠には多く效がない。但し稀には非常に頑固で他の方法の效なきときには著しき效果を呈すときもある。

器質性腦脊髓疾患　神經系に粗大な解剖變化を有する場合に精神療法が直接に何の作用をせないのは明かであるが、然し決して不用ではない。卽ちその慢性のものには、生命には何の關係なきことを說き聞かせて患者の元氣を維持し、別に日常生活には精神の害となる凡ての害因を避け、場合によりては隔離、若しくは適當なる鬱散法、作業法を課しその生活法を調整する。然し器質性腦患者には通例は仕事は與へざるがよい。又、或運動麻痺の患者には精神の鍛練法が必要である。暗示療法も奏效する事が尠くはないが、器質性疾患に來る器質性症候例へば局所麻痺、感覺異常等は別とし、單に其一般症候として來る病感、不眠、頭痛、眩暈等は屢屢之によりて治することが出來る。從來理學的療法で奏效したと思はれてゐたものゝ大部分もその實は暗示の働きによるか多いのである。言語的暗示は其效尠く、假面暗示はその應用が當

を得ば、しば〳〵著效がある。それから器質性腦脊髓疾患に催眠術の良効あるは諸家の等しく認める所である。

此器質性腦脊髓疾患の精神療法は移して、以て他の種類の器質性不治性慢性重病の場合にも同じく通ずるのであるから、其等の代表者として考へるがよい。

二　種々たる精神障礙

輕度憂鬱症　憂鬱狀態は純粹なる精神病として來り、その高度なるは精神療法のみで治することは出來ぬ。然し輕度なる定期性憂鬱病或は神經衰弱の症候として來るものには精神療法は大ひに効を奏する。此等の患者には說得を加え、懊惱する事態を自白し自己の祕密を懺悔せしめるときは、大ひにその病苦を減ずる。かゝる際治療家は一時性の然かも治癒し易き疾病なるを說明し、また業務上に出精すべきことを敎ふるときは心機を一轉するの効がある。又患者の狀態、嗜好に應じて適當なる仕事、鬱散法を與へるも心機一轉の好手段となる。假面暗示は憂鬱者の煩悶、不眠、食慾缺乏によい。但し催眠術は大體に卓効がない。

强迫恐怖及强迫觀念　多く神經衰弱の症候として、特に體質性神經衰弱には其著明なるものを伴ひ或者には獨立の疾患として現はる、而して或者には身神の疲勞貧血を起す。其他姙娠授乳、產褥、失血の後に一時性に、その他稀に「ヒステリー」癲癇、白痴等の精神病の症候として來る。從つてその治療には主として其原因や且つ本病の何たるやを知らなければならぬが、然し此等の原因的乃至對症療法は効果はあるにはあるが、併し必ずしも十分でない事がある、其時には强迫恐怖や强迫觀念其者に對する精神療法が必要である。卽ち漸次練習により精神の抵抗力を强むる精神の操練の外、その現はれる症狀により異同はあるも、慰藉說明、遣散作業、暗示療法等を講ずべきである。患者の意思稍や强固にして治療者の命ずる所をよく遵守するものにありては、一片の說諭もその機宜を得れば、それに由りても良効を奏するものである。勿論この際、治療家は患者に對して十分の權威と信仰がなければならぬ。作業、遣散療法も効があるが、此等と雖も患者の如何によりてその方法を考慮すべきは固よりである。かの鑿索症、自殺觀念及び疾病恐怖の極めて强烈なるものならば、心機の轉導に、場合によりては强力なる注意を要求する作業、例へば翻譯、算用を課し、間に休息を交ゆるがよい。また疾病恐怖

者に慢然と嘲笑や諧謔をなすは、たゞへ好意から出づるにもせよ、決して良果を生ぜない、否失策の甚しきものである。それから時として强迫觀念の自白自身も亦一つの精神療法となることのあるも注意すべきである。催眠暗示または覺醒暗示の奇効を來すこともあるが、此等が比較的良果あるは「ヒステリー」神經衰弱等官能的疾患に來る强迫觀念に對してである。

幻覺、錯覺、妄想　幻覺錯覺には注意轉導法の効果あるは何人も知つてゐるが、たゞ幻錯覺を來すと同じき感覺器を用ふるときは幻錯覺が增加し又は減少する等、其成績は不定である。たゞへば幻聽又は耳鳴のあるものに日々一定時間音叉を用ふるが如きが是である。然し幻錯覺と異なる他の五官器を刺戟して轉意せしめるときは多くは幻錯覺の數を減ずる。例へば種種なる幻聽あるものに讀書や手藝等視覺を要する作業を與ふる如きである。注意轉導としての作業又は遣散は急性の妄覺には適當ではなく、亞急性及慢性の場合に効がある。暗示法としては覺醒暗示は効がない。催眠暗示は稀に急性幻覺性偏執病に、尙可なるはヒステリー性精神病特に朦朧狀態の幻覺に効がある。

妄想は感情異常から生ずるものはその感情異常に對して精神療法を施し、幻覺のために生じたものならばその幻覺の精神療法を施せば相應に効がある。凡て妄想は直接、その理由なきを說諭しても何の益もない。妄想の中で原發性の系統妄想は比較的に精神療法でその進行及固結を防衛し又は長く其發生を遏止し得る。特に注意轉導法で客觀的に興味を注入するのはその効は多い。但し暗示は系統妄想には確實なる効がない。それから精神療法の好對象となるのは「ヒポコンドリー」性妄想である。此妄想は多く身體の異常感覺から起るのであつて、特に神經衰弱に多く「ヒステリー」には追跡妄想の型となつて現はれ、其他諸般の精神病の症候として來る。此等には遣散または、作業等により自體の健否を懸念する思想を强く他に轉向せしむれば効がある。醫家が此等の患者に症狀を說明するには無用の理論に走らず、嚴密に診査せる後、純粹に他覺的所見に基き最も簡單、然かも明瞭なる言辭を撰定して、その重病ならざる所以を言明し慰諭するが良い。漫然と病者の心に迎合して、豫後の急速に佳良なるを云ふが如きは輕卒であり、失敗である。

叡智缺損特に先天性發育不全　先天性の叡智缺損に對し精神療法は無効だと云ふものもあるが、必らずしも左樣ではない。素より腦髓の發育に病的の制限あるが故に、その制限を

超えて精神機能の發展を望むことは出來ないが、良好なる場合は、凡ての神經細胞と聯合纖維をして觀念及觀念聯合を生ぜしめることが出來る。故に白癡に對しては精神療法が全く無効だとは云へぬ。但し近時の內分泌說によれば、一定の精神薄弱には物質療法が往々効果あるは決して看過すべからざることである。チーヘンの說によると多くの白癡教育が無効と見做さるゝは、精神療法に最も適當なる年齡を看過するからであり、その最も適當なる年齡は四歲で、學齡若しくは、その後に至り訓育を初むるも時機は既に遲いと云つた。而してチーヘンはそれに對する精神療法的手段を擧示したが、茲には煩雜なる嫌ひあるを以て省略して置く。

中毒　中毒と云ふもこゝに謂ふはアルコール及びモルヒネ中毒を指す。此等中毒者の主症候は、それらのものを用ふるは有毒有害であるとは知つてゐるが其慣用を禁ずることが出來ず意思薄弱、道德感情が微弱となるのである。之れ等には夫れを用ふるを禁ずるが第一の必要であるが。慣用を禁ずるには、アルコール中毒者ならば、覺醒暗示も一定の効がある。フォーレル等は禁酒には催眠暗示が甚だ有効だと云ひ、一旦、暗示によりて治したものは禁酒會等に入り外界の誘惑から去ることが必要だとした。「モルヒネ」中毒は催眠暗示により「モヒ」の嫌忌すべきを暗示し、後初めて「モルヒネ」の去奪を暗示すべきである。假面暗示もしば〳〵應用せられる。

三　呼吸器系統の疾患

吸呼器疾患のうち精神療法の好適なるもの、一は神經性咳嗽である。これは感情の興奮、一定の觀念、其他急性氣管支カタル、咽頭カタルの後に習慣となつて來るのであるが、症候には等差がある。一定の感情及觀念に關係あるものは、其原因に注意せなければならぬ。家庭では如何にするも治せなかつたものが環境、周圍の事情が異るによつて完全に且つ速かに全治した例もある。極めて輕きものは意思の力、或は注意の轉導により制することが出來る。通例、深き吸氣を維持せしむるが療法となるを以て此際は咳嗽の發作あるも之に惑はさるゝことなく吸氣運動を行はしめる。蓋しこの法は一は器械的制壓と、他は暗示作用とにより奏效するのである。その他の假面暗示も同樣の効がある。催眠暗示も時としては偉大なる効を見せる。ヒルトは八年間本病を患ひ、他の理化學的療法も何の効なく、本體不明なる不治肺患と診斷せられた

一男子を一回の暗示療法で治癒したこの例證を報告した。「ヒステリー」性聲門痙攣は、精神療法の治驗例は尠いが、電氣を應用する假面暗示は多少の効はあらう。「ヒステリー」性聲門麻痺に色々の方法は講ぜられるけれども、それらの諸方法で治するのは凡て「發聲可能の觀念を抱かしむる」暗示作用に外ならぬ。時としては靜かに嗄嘶音のまゝ發音せしめ、漸次に聲高く發音せしむれば、遂に清朗有響の音を發して治することがある。

喘息は神經質に來るものは、精神療法の好對象である。此場合の喘息の起る理由は一回呼吸の止まつた際に窒息するならんこの恐怖が持續するからで、卽ち窒息恐怖の觀念病であるこ云はれて居る。それで肺活量器を吹かしめる等の方法で肺運動を演習せしむるが如き、暗示療法は大ひに症狀を輕快する。或は他人の模擬によりて起るもの、如きには、又種々の暗示療法で治癒し得る。たゞ遺傳性或は氣管支性の喘息に對しては精神療法の効は薄い。但し肺氣腫より來る喘息に於ては暗示により氣腫そのものは治せないが喘息は之を輕快することは出來。或は時に氣腫を輕快し得る。

四　循環器系統の疾患

器質性心臟疾患　に對して精神療法の効は微弱であるが心臟及脈管の機能性疾患、殊に神經衰弱から來る心臟衰弱にして發作性動悸、脈搏遲除、胸內絞窄、心臟動作の遲除、結代、不整、心臟部の疼痛、壓迫の感、その他苦悶狀態等の症候を起したものには、尠からぬ價値がある。之を行ふには先づ其等の諸症を誘起し、或は持續せしめる精神上の害因を知らなければならぬ。多くの場合、これら官能性諸症の誘起や持續は腦の疲勞よりは、寧ろ不快性感情、卽ち恐怖や憂慮や悲嘆や憤怒などの激昂に關して起るものであるから說明慰藉が當を得、又は相當の仕事や鬱散法を命じたならば、此等激情の原因は根本的に去るを得ざるにもせよ、大ひに感情を寬和し諸症を輕快せしめ得る。

神經性心臟衰弱　の發作性或は持續性症候卽ち心搏の遲除、浮速、不整等に對しては暗示療法が著効がある。假面暗示により脈搏を減じたり、恐怖の念を去らしめたりすることはしば〳〵實驗される所である。又之等の療法手段は「ヒステリー」性の胸內絞窄にも用ひて効が

ある。

以上凡ての心臟障碍、又一部の器質性のものに於ても適當なる説明安慰の語等に加ふるに、横隔膜調整運動、腹式呼吸等をなさしむる時は、大ひに効果のあることがある。

五　消化器系統の疾患

胃疾患に對する精神療法の用は甚だ廣い。胃は精神影響によりその運動及分泌作用を障害し或は之を亢進し、または嘔氣嘔吐その外の自覺症狀を起すの生理作用を考へたならば其理は明かであらう。精神療法は獨り精神性または神經性の障害に限らず、尙器質性胃疾患にも及び、特に器質性胃障害であつて、器質性原因から生ぜるものゝやうに見える病であつてもその實、精神的原因からのものもあり、之れらの病症に對しては、精神療法の効は著るしい。

通例、神經性胃障害または神經性ならざるものでも心痛あるものが、その心痛を去るときは大ひに消化不良を醫するものである。其輕きものにありて簡單な旅行、又は暫時の田園生活により心機を轉散して優に治するに足る。マチエンやルーは「ヒステリー」性食思缺乏、また嘔吐には隔離療法が著効があると云つた。或神經性胃病者には單に消息子送入により胃内容に著るしき變化なきを證明したばかりで、大いに安慰され輕快したといふが如き例は珍らしいことではない。胃部に不快感ある神經家が該局部を懸念する結果、胃潰瘍の如き疼痛を發するやうな事實もあるが、此等も精神的方法により易々と輕快ならしめ得るものである。暗示療法は神經性胃障害に何れも効が多い。

それから神經性腸疾患、卽ち放屁、腸過敏、疝痛、下痢、便祕にも神經性胃症に於けるがやうに暗示療法は奏効する。「ヒステリー」性神經衰弱によりては間々嚥下痙攣、嚥下麻痺等の障害を起し、食滋の攝取を困難ならしめるものがあるが、之には電氣を應用したる假面暗示などがに効多く、純粹なる言語暗示も亦効がないではない。

六　兩性生殖機能の障礙

男子の生殖機能の障礙中、精神療法で治し得る好例の一は精神性陰萎である。レーウエンヘルドは精神性陰萎を二種に區別した。第一は精神の複雜なる原因から起り偶然陰萎たるの觀念

と一種の恐怖から起るのであるが、最も多くは元來性慾の微弱なる男子が、輕度の神經衰弱狀態を呈するときに來るので通例陰萎と稱するものは此種類を指す。第二は感情の激烈なる興奮及び精神の過勞によりて來るものである。たとへば從來、何の異常もなかつたものが、新たに職業を轉じ、爲に過度に精神を勞し感情を興奮するときに急に陰萎の如き狀態を呈する。

第一種の陰萎を治癒するに其原因事情を說明すれば、その害を除き得るであらう。それには先づ生殖可能の條件を擧げて其異常なきを說きて安心を求めるがよい。斯る說諭にも滿足なる効なきときは、何等かの方法による假面暗示を用ふるがよい。第二種の精神性陰萎を治するにも前に似た病狀及其原因の說明は必要である。而して職業の爲に心思を勞し憂慮を抱く間は房事を禁ずべく、又この場合にも假面暗示は必要である。それから此陰萎のうちには神經衰弱に原因して來るものがある。かゝるものは神經衰弱の故に勃起不能を起すのであるが、之には落膽の無意義なるを說明して恐怖を去れば大いに益すべく、且つ居常自家の性慾機能の狀態に介意せざるやうに敎ゆるを要す。暗示も亦効がある。

次に性慾の刺戟狀態、卽ち腰髓官能病の興奮性型たる勃起過度、精漏、早漏、日中精漏等に精神療法は直接的なる著効はない。然しその應用を忽にしてはならぬ。第一は思想の規律が必要である。色情に關する讀書、觀劇を避けしめ、思想が色慾界に奔逸するを防ぐために適當なる仕事を命ずる。尤も仕事にあまり注意を要するものは、健康人には色情の昂進を鎭制すべきも、神經衰弱者には却つて疲勞を高めて害があるから此點に警戒を要する。勃起過度及早漏は催眠暗示にも効はあるが催眠し得ぬ場合もある。每夜遺精をなし、その結果、心氣性憂鬱性となつてゐるものには一般攝養法の外、假面暗示も有効である。

更に淋病性神經衰弱にも精神療法は不可缺の手段である。これは一名尿道心氣症と名づけるもので、患者は絕えず恐怖心を以て、尿分泌の狀態を監視し、甚しく感情を痛め病苦を增すの疾患である。此疾患は時として不治性であつて、多くはその初め局所治療の濫用的持續から來る。フユールブリンゲルが云つたやうに、局所治療を廢するときは心身に佳候を呈し全治するを得る。

その他、睪丸、精系、會陰部、尿道部の感覺過敏、疼痛、感覺半麻痺。攝護腺、膀胱の感覺過敏等で、その淋病に因せざるものは、假面暗示法を行ふによりて治し得る。

色情倒錯には、ベルンハイムによると催眠暗示が効があると云ふ。或は精神分析もよい。

轉じて女子の生殖器疾患中、精神療法に適するものは、該部の機能的疾患は殆んど凡て其れであつて應用が頗る廣く且つ効能が多い。陰部瘙痒、膣痙攣、子宮痛、卵巣痛、生殖器過敏、色情性感覺脱失等がそれであるが、但しその中、陰部瘙痒がもし不眠、憂鬱、生殖器過敏を呈するやうになり重篤なる症候を呈する時には精神療法のみで全治するは期し難い。それ故に原因的身體療法その他の普通療法を主とすべきである。膣痙攣には假面または催眠暗示療法を應用すべく、局所療法にも暗示が有效である。色慾性神經衰弱に罹つた婦人の生殖器過敏、快美感脱失には祕密なる事情の究明、それの適當なる説明的處置、精神分析及び催眠暗示は何れも著るしき效があり、子宮痛、卵巣痛には種々の假面暗示を用ふる。

また婦人生殖器の解剖的變化、特に子宮の位置異常の際に於ける症候は必ずしも直接局所變化に原因して起るものではないと云ふのが、その方面の專門學者の云ふ所であるが、タイルハーベルは、子宮の位置異常の際に起る症候、特に腰痛、腹痛、及び出血は子宮の位置異常から起るのではない。同時に關係ある他の骨盤腔器關から起るか若しくは神經作用に外ならぬのである。從つて此際理化學的ならざる或は不合理なる所置の效あるは一部の暗示作用に外ならぬと云つた。又以て此等の疾患に暗示作用の奏效する所以を知ることが出來よう。それから催眠暗示は女子の骨盤腔諸病に卓效がある。

次に月經は精神影響で、或は早期に現はれ或は閉止し、または中止することあるは人の知る所である。然れば其障害に精神療法の效あるは言はずして明かであらう。特に單純なる想像により月經の開始を遲延せしむることさへ出來る。フォーレルの經驗した一貴女は月經時期の來る頃、その翌日舞踏會に出席するの約あるときは、左の小指を紅色の絹糸を以て緊縛するときは、確かにその效を得たと報告した。此俗に云ふまじないにも斯る效あるは、畢竟その婦人の自家暗示の作用に外ならぬのである。リーホルト・ボアザン・ベルンハイム等は催眠暗示に由りて種々の月經障礙を去つたと報告し、ガスカルド・ベリロンは月經過度で瀕死の狀態になつた患者に止血の催眠暗示をなし之を卽治し得たと報告してをる。斯く催眠術で月經の持續を短縮し得るは毎回然るにあらず、而してそれは催眠の深度、卽ち睡遊狀態は好果を擧げるに關係があると謂ふのである。

以上の如く生殖器疾患、特に婦人科疾患は機能性なるものは勿論、一部の器質性のものも精神原因にて生じ、又精神療法にて大に效果を擧げ得る方面で、近時は一層此等の關係は精確に且つ饒多に專門家によりて檢索せられ、性的諸障害の叢書或は專著なるものは、一般讀者向のものでも實に汗牛充棟の盛況を呈しておる現況である。就ては聊か餘談に亘るが獨國ツービンゲン大學婦人科教授のマイエル氏が之れに關する述懷は、實に現代醫學の趨勢を抽寫し同時に如何に婦人科病に精神影響の深刻なるものなるかを語つておるものあるを以て、茲に之を抄譯する。其意に曰く。

抑も婦人科は其の初め外科より分離せるものにして、最初は外科の一小附屬科に過ぎざりき。然るに外科其他の進歩に伴ひ漸次に一大分科となれるも、而かも爾後幾十年間は婦人病に對し、外科手術が治療法中の樞要位置を占めたりき。然るに光線療法の起りて（例へば腹壁切開後其他の場合X光線其他太陽光線を用ゆる如き）着々其效果を擧ぐるに至り外科手術は婦人科療法の重要なる部分なるも其全部にあらざるを知りて以來、X光線は次第に外科の「メス」を奪ひて其領域を爭へり。由來外科療法家は一局部の疾病さへ治癒すれば爾餘の身體部分の障害は其反響によりて恢復し、全身治療より分離せんとするも、光線療法家は局部の療法を施すのみならず、少くも全身の防衛力の一部を變更せんとして全身治療との分離を益々固く纏結し、かくして愈々好結果に達せるの故に光線療法家は始めよりの意志にはあらざりしも、其疾病を見るや局部の疾病にあらずして病人全體を眼中に措くことゝなり、不識不知治療の原則に變更を來せり。斯くの如くして婦人科は頻年「外科よりの解放」との標語を唱ふることゝなりぬ。さて、かくして病人の肉體全部を眼中に入れて之を治療することに歸れるものゝ、尙ほ更らに治療法の大不滿を覺れり。其は吾人は實に「肉體の背後に精神あるを忘れたるなりき」。精神作用と婦人科病の關係を檢索するに、檢索すればする程其原因となり又治療法となる影響の廣大なる、實に人の豫想以上に出づるものあるなり、茲を以て婦人科に於ては「多々精神を見よ、精神肉體並び見よと」は近時の治療界に於ける標語となれり。要するに婦人科療法は外科の原則より離れて全身療法に改宗し、全身療法は肉體療法より精神療法に進み、心身兩方向に回慮することに進みたるなり。かゝる見解の變遷は近時發行の教科書或は全書に就て歴々其證跡を徵すべし。

今世紀の初め迄は世界的に有名なる教科書すらも、婦人科病は單に個々の器關病として擧け之にて滿足したるものなりしが、今日は該病に關しては體質、心理、生殖器の官能的神經症、性的精神異常症、及び精神療法は須要なる一編章をなし、詳細なる說述の下に出版せらるるを見ても之を知るべし。ヒステリの觀念の如きも亦從來より一變せるなり。云々。

七　泌尿器系統の疾患

尿道疾患の中で「ヒステリー」性の寡尿、及び無尿は假面暗示で去ることが出來る。「ヒステリー」性多尿に暗示療法、藥物の假面暗示、催眠暗示も凡て効がある。神經衰弱、或は「ヒステリー」から來る所の尿意頻數、膀胱痛ある疾患たる膀胱過敏性や「ヒステリー」の膀胱痲痺は假面暗示で効がある。夜尿には精神療法が有効で、時としては普通の教訓も効がある。卽ち就褥前、或は夜中一二回は起床して排尿を命ずることもある。假面暗示は各種の手段を用ふる。催眠暗示は夜尿に甚だ有効であるが、暗示の言語は單に、「汝は今夜から遺尿せない」と云ふだけでは無効で、「汝は夜中尿意あれば、之れを感じ、そして覺醒すべし」と云ひ殊にこの「感じ」なる語を明白に云ひ渡すべしとはウェッテルストランドの云つた所である。またベリロンは、最初行ふときには前者と同じであるが、此法が無効なるは、子供が餘り深く睡眠するからであると假定し、爲めに不眠を暗示するを必要とした。此等は參考とすべき說たるを失はぬ。

ついでに子供の夜尿に精神療法を行ふに就て、參考になる事があるから左に述ぶる。

小兒科のボトッキー氏の觀察に依るに、他の脊椎破裂や、尿道の局所病や、蛔虫等の器質性や又反射性の原因なき全く精神的に來る所の子供の遺尿に四種類あるを確めた。其は何れも神經性兒童で、其第一は父母、先生に對してすねる氣のある兒童で、何か自分の意に反し其等の人に恨があり怒りがあるとすねる氣で晝は勿論、夜も遺尿をなすのである。第二は臆病な過敏の子供で何か不快なことがあると其爲めに遺尿する。而して夜間に遺尿の來るを恐るゝ爲めに遺尿するのがある。第三は注意散亂性の子供で、遺尿を防ぐ樣に注意を集注するを得ず其時毎に排尿を忘れて遺尿するのがある。第四はこれに似たもので無頓着の性質の子供で、遺尿するも少しも之を痛痒として感ぜず、而していくら敎へても防ぐ氣のなきのがある。此等は皆其れ〴〵其場合に從て精神療法を施すべきである。

又、左の如き例がある(以下二例維納シュワルッ氏經驗)

尿意頻發—膀胱緊張過敏體質—精神療法—治癒

二十四歳の青年、十八歳の時、尿道前半部の淋病に罹り五週間に亘る局部正規療法で治癒した。然るに其後如何せるわけか、高度の排尿頻數を起し規則正しく毎日、時としては晝間は二十回迄、夜間は必ず三四回起きることに苦められた。ごうしてかくなるや患者は何も心付かい。然るに詳しく病歴を調べると、大切な事實が現はれた。其は患者に兄があり其兄が平常二十四時間乃至三十六時間に一回しか排尿しない習慣であると云ふのであるこうして見ると患者の家族には膀胱緊張異常ある系圖で兄は其緊張減退、弟が緊張過敏の質であり、其爲め一時の尿道カタルが誘因となり、患者の精神を刺戟して尿意頻數を起し全く精神性體質性のものなることがわかつた。其處で諸般の精神療法で神經過敏を鎮制し治癒することが出來た。

尿意頻數—隱れたる强迫觀念—其治療—治癒

次ぎの一例は三十四歳の男、患者曰く二三日來急に激烈なる尿意頻數に苦められて困まる。特に困まるのは共同便所に入りて自分獨りの時は排尿は出來るも、多勢の見る所では出來ない。家に居れば何時でも出來るからして比較的らくである、それで小用のよく可能なるは、場所で言へば、近所に友人の家があるとか、時間で言へば共同便所の數秒步以內の近間にある時である。患者はかように立派に明白に己れの病狀を語るのであつたが、本人は勿論予自身も最初は其何の意たるを解せなかつた。兎に角膀胱の局部治療を施せるに疾病は驚くべく輕快した。然るに患者は其後間もなく臨場苦悶の强迫觀念を起した。其處で予がはたと膝を打つて思ひ付いた。何の事よ、患者の先きに訴へたることは「外ことに出るのが恐しくて出られない」と云ふのが其眞義で、其れが初發の心持ちであつたのである。自分と其他の鈍腦のものは皆誤り考へたので、考が途方もない所に脫線せるを心付いた。其後强迫觀念の精神療法を行つたので、患者は漸次に治癒した。

八　關節及筋肉に關する疾患

普通の身體療法が効を奏せず、然かも精神療法で卓効を現はすことがあるのは關節炎、殊に

慢性リユマチス性關節炎である。既述したやうに加持祈禱や靈地の巡禮、または温泉が此等の疾患に對し、奇効を博することは、暗示療法に從ひ得べき性があるからである。グロースマンは云つた「慢性關節リユーマチス」、或は痛風で運動不能の起る理由は、關節の解剖的變化よりは、寧ろ疼痛に原因するものであるから、此等の患者に催眠暗示を行ひ、疼痛の減滅を暗示するときは、運動は恢復し、同時に關節の退壞を防禦することが出來ると。是れ一理由のある言である。殊に氏によれば「關節に於ては病的現象全く去り、單に疼痛の殘存するとき、此疼痛は多くは自家暗示の作用で起るものであるから、此際暗示で該疼痛を去れば、該病の完全的及持續的治癒が得られるであらう」と。關節の腫張にも言語暗示に加ふるに、關節の撫摩または厭迫を加ふるの假面暗示は、よく其腫張を減退することが出來る。

九　佝僂病、外科、眼科、耳科、産科に於ける精神療法の應用

佝僂病には催眠暗示が卓効があるとして知られる。然し通例は鐵劑の内服の外、適當なる攝養法を行ひ、その攝生法の效なきとき初めて催眠暗示を行ひ、食機不振及び種々の神經症狀を去るを以て順序とする。然るときは、身體の外形も漸次に治するに至ると云ふのである。

それから附加してをきたいのは外科其他に於ける精神療法の應用にある。既に說いたやうに廣義の精神療法は諸科に通じて必要であり、特に外科醫に於ても病症の重篤なる場合精神療法に通曉するの必要なるは決して内科醫に讓らない。よろしく適當なる態度と病狀の說明により悲觀絕望せる患者の心膽を鼓舞し、抵抗力を喚起し、病苦に對し忍耐と頑强心とを養成せしめなければならぬ。その外、外科疾患に暗示療法の必要なる關係を概言するには「手術前の最終の瞬間には、患者の被暗示性は甚だ昇進するもので、若しこの瞬間に、手術の目的を說明し、治癒の觀念を興起するときは、一言と雖も强力なる痲醉劑の如くに作用し、手術をして容易ならしむるものである」との米醫ダビスの言葉を紹介すれば足りるであらう。また催眠暗示は齒痛、その他の小手術には適するけれども大手術の無痛を起すには到底「クロ、ホルム」或ひは「エーテル」痲醉には及ばない。これ催眠暗示は何れの患者にも適せず且つ長時間の手術に必要な程度の無痛の持續、强度、及び手術間の安靜を得ないからである。但し稀れに例外のものあ

るは勿論である。

外科に於て精神療法の必要な事については、茲に蛇足ながら、往年後藤朝太郎文學士が怪我にて骨折を起しやがて神經過敏となれるの後、整形外科に入院した經驗に就て病人の心理を自白し詳細に記述してあるから(變態心理大正九年號)其中必要の辭句だけ切れ〴〵に擧げて初學者の參考に資したい。

先づ手術室に向ふのは死地に向ふ樣な感じがして何んとも云はれない――。クロロホルムがかけられる前には若し一度麻醉にかゝれば最早生き返られないかも知れぬとの恐怖心に囚はれる――。一度疼痛の文字通り骨髓に徹する手術を受けると、手術室に對して一面には難有いが他面には近寄りたくない樣な感じがする――。整形外科で一番恐ろしいのは手術後、長日月使用せざるため曲らなくなつてゐる指や手首を「あゝしろ」「こうしろ」と無理に曲げられたり、力任せに引起されたりすることで、其時は仁者たる主治醫の手が其心にも似ず、全く鬼の手のやうに恐ろしい感がしました――。斯ふした苦痛は毎日忍ばねばならぬ、どうして其日を經過しようか――。そして餘計なことだが、整形外科の醫局員には是非とも一度は此苦痛を實感して置いて貰へると、患者に對して一層適切な治療をさることゝ信じます。

此被術者の心には、手術の恐怖、麻醉の恐怖は、誰れにもあることで、手術者には其邊折角精神療法の用意はあることであらうが、さて整形外科の强行屈伸の演習療法は、往々にして非常な劇痛の下に行はれるもので、予は學生時代から、後藤氏の訴ふるが如き事に心づいて居たが、最近年にもまだこのやうな事があれば、何とか神經性慢性的經過の患者の場合には、特別に精神療法的の工夫を以て改良して貰ひたいことを希望せざるを得ぬ。

眼科疾患に於て精神療法に適する二三のものを擧げて云へば、「ヒステリー」及神經衰弱から來る眼精疲勞である。此疾患は人の知るやうに目を特に夜間に使用するに當り、早く疲勞を覺え眼瞼に疼痛を來すので、時として此症候は甚だ頑固である。かゝる症候には假面暗示は著るしく効がある。それから「ヒステリー」性黑內障に精神療法は卓効がある。盲者が神佛に祈願を籠め、その御利益を被りて明を得たと云ふ奇蹟談の如きは此類に屬する。これらは暗示、特に自家暗示等によりて効を奏したのである。時には不快性精神感動、たとへば恐怖感情のため

に明を恢復したといふやうな例もある。但し他の黑內障は其うは行かぬ、間違つてはならぬ。又「ヒステリー」性眼瞼攣搐や痙攣には假面暗示が著効がある。

耳疾患のうち精神療法に適するは「ヒステリー」性聾、神經原因の耳鳴や重聽等である。ウエッテルストランドは六七年來耳聾のあつた患者に偶々その頭痛を去るために催眠暗示を施すと聽力が恢復したといふことを報告した。

次に產科に於ては催眠術的無痛は效用がある。場合により催眠暗示によりて陣痛時の疼痛の減減、分娩經過の短縮或は延長、一定期間陣痛の發來、迫り來る早期分娩の防止に成效し得る。ボンジュールは催眠暗示で五人のうち四人に分娩を所望の日に行ふを得せしめたと報告してゐる。

十　皮膚に關する諸疾患

皮膚病と精神療法と云へば、卒然と聞けば頗る緣の遠いやうに思はれるであらうが、決してさうではない。近時、內分泌說や交感神經作用、從つて分泌榮養の學說が注意せらるゝに從ひ皮膚科方面の疾患で、精神作用と密着の關係を有して發生するもの、多々ある事が益々注意せられて來た。

頭髮が悲哀や心配で、早期に白くなると云ふことは疑ふべくもない。それも時としては非常に早く白くなつたと云ふ事を聞く。但しこの事は多くの人々から疑はれても居るが、左樣した變化が、左樣に俄かに、どうして起るものであるかと云ふことが非常に理解し難い關係があるので、此事を疑問としたのは、ヘブラとカホジ氏である。然し左の如き事が歷史に出てゐる。日本歷史では、藤原顯光が、其女が道長の女の後宮に入りしより寵を失ひ死せるよりして、怨恨憤滿の結果、一夜にして頭髮が悉く白くなつたとの記錄がある。之は何人も知つてゐる所であらう。西洋では、マリー・アントイネットが、死刑で殺される前數時間で、頭髮が白くなつたと云ふ史實がある。これも亦曾知の事であらう。ボヂン氏は、皮膚病雜誌で、斯樣な問題を取扱ひ頭髮が恐怖によつて非常に早く白くなるものであることの多數の信用し得べき報告を掲載して居る。バリと云ふ人の自ら見たのでは、一人のベンガル軍の黑人が、擒にせられて、大砲の口元に縛せられたものが、半時間以內に黑き頭髮の眞つ白になつたとの事實がある。

其他神經病、精神病、癲癇及び神經痛のときには、頭髮が場合によつては可なり速かに白くなることがある。或は時によりては、毛の變る色が交互に相繼續することがある。ラインハルドの見た一人の白痴で、躁鬱病に罹つたものが、その昏迷期に於ては、毛が透明黃色となり、亢奮時には黑味ある黃金赤色となり、そして夫れが一日の中に、先づ毛の尖端から變化し、かくして發揚期と昏迷期と、正しく交番して現はれるを見た、云々。

脫毛、禿髮。上記の頭髮の白くなると云つたやうなことは、禿頭の或場合にも來る。心配、憂愁、並らびに或神經病、五官病によりて、早期に禿頭の來ることは確である。文藉を見ると、外傷の後や、腦震盪の後に頭髮全部がなくなる、卽ち禿頭を來した事例が澤山にある。或は精神のショックで、急に頭が禿げたと云ふこともある。禿頭病の種々の場合に、精神作用が一の重要なる原因をなすのは確かな事實らしい。その事に關する文獻も澤山にある。殊にストランドベルグが早發性痴呆患者に經驗したのは、全禿頭をなせるのであつたが、而して該病が寛解期になると、毛が再發するのであつた。

その他、此樣に精神原因で皮膚潮紅症、紅斑、天然痘瘡、瘡痒症、蕁麻疹、皮膚病恐怖症、發汗の異常が單獨に、或ひは諸般の神經病と共に來ることが、年と共に漸次に精確に注意せられつゝある。

要するに以上の精神原因の皮膚科疾患は、みな一定度まで精神療法に從はしめ得べきもので此方面にも、從來の理化學的療法の外、精神療法が漸次に勢力を及ぼすであらうと信ずる。

餘論

左掲二題は著者が昨夏郷里(山形縣庄内)の育英園の需めに應じて歸省し、其要求たる文化運動の一端として、一般公衆に講演せる所の速記抄錄である。

第一題は恐らく醫師にあらざる一般諸君に、現時醫學全般の如何なるやの總括的概念を與ふると同時に、全醫學に於ける現時の精神療法の地位詳言すれば物質療法に對する精神療法の現況を窺ひ得べく、從つて本書の緒論の緒論とも見做すを得るであらう。

第二題の體質及び性格は本書本論の豫備智識編として最も重要なる關係ある事項なるが、是れは研究中のものにして、前にも斷れる如く、他日更らに別著を以て世に問ふべく、兎に角現時の生物學的性格論の如何なるものなるやを大雜把、輪廓的に、最も平明、最も通俗的に講話した積りである吾人の心身的治療なり、教育論なり文學歴史論等なりは此見地より出發しようとするのである。

講演は郷里三ヶ所、三題にして他の一題は精神の身體に及ぼす影響如何(鶴岡市)と云ふのであつたが、これは本書内容と全然重復するから略する。

以上の二問題は彼此の點に於て、本書の内容と重復し又講演の態度を異にするため不統一の點あるも、本書の補遺として適當と考へるから茲に附載する。

輓近醫學の趨勢

(昭和二年八月二十日於山形縣酒田町)

一

八年振りにて御當地に參りまして、今日御清聽を得る事は私の頗る光榮に感ずる所であります。扨て諸君の多くは特別私の御懇意なる友人とも見做すべきでありますから、諸君より久し振りで逢つた自分に、わけもなく今日の醫學は近頃一體どんなものかとの御質問を發せらるゝは甚だ自然の事であります……でかく質問せられて見ると自分は全くのところギャフンと參らざるを得ないのであります。と云ふのは御承知の如く毎年四月に開かれる醫學大會におきましては、その分科は二十以上もあり、演題數は二千にも達し、講演者は千人をも踰ゆると云ふ有樣で、其演題の如きも專門外のものには其概念すらもわからぬ程であり、宛も山に入るもの山を見ずの有樣であります。然し此處に御質問があれば、私が聽診器を持つて居る手前、何とかお答せねばならぬ「はめ」となります。前述の如く醫學の分科は二十以上もある中で、自分の如きは其一科たる精神神經科に屬して、ごうかするとと蚊の如き聲を發することがありますが、

此一隅から醫學全體を觀察するのは、殆んど醫師にあらざる一般諸君が觀察せらるゝのと變らないかも知れぬ。しかも退いて考ふるに、苟も年來醫學に携はつてをる以上、醫學の潮流は現在何處に如何樣に流れつゝあるかは是非心得て置かねばならぬ義務がある。自分の仕事を見るこ同時に全醫學は如何なるものなるかを考察せねばならぬ。で旁々久振りで逢つた諸君には聊か醫學の復命をする積りで御話するのであります。

扨て醫學の御話して一體何の役に立つか。こ云ふ問題こなりますこ、衛生こ云ふ事は嫌でも應でも重んぜられねばならぬ時代こなりました。ウイルソンの結んだ國際聯盟第一箇條には、戰爭の廢止、第二條には、はや個人及公衆の衛生の事が規定せられて居る樣な次第で、以て世界人心の歸趨を見るべしであつて醫事衛生的の智識は今後公衆の爲め益々必要なのであります。

二

醫學の範圍は頗る廣汎で各科の進歩は夫れ〳〵歷史を作して居りまして、最近五六十年の進歩を見るだけでも數ヶ月を要するのである。就ては茲には井蛙の見聞に屬する極々の大略を述べる事こする。醫學は診斷治療の臨床科や解剖生理の基礎學科等澤山あるが、何れも分科に分科を生じて研究部門が擴大した。今一昨年の日本醫學會で設けられた新設の珍らしき獨立部門を見るに、腫瘍科、結核科、矯正外科、「レントゲン」科、軍陣醫學(是は以前より存す)醫療機械學科等である。而して疾病の如きも驚く可き小別を生じて、其の方の專門のものにあらざれば知らぬ病名が幾つもある。殊に黴菌に依る病氣の如きは殆んど極め盡して居るやうだが研究は益々盛である。近頃飛行機が盛んになれば航空生理や又航空衛生こ云つて、現に最近是に關する豫防法案が出る樣の始末、潛水事業や潛航艇が發達せば特殊の潛水病が發見せられ、其れが研究せられつゝある譯で、獨り地上凡ての疾病のみならず天上地下、生活のある所疾病ありの衛生ありで何一つ追究せられざるなきの有樣になつて來た。此頃では吾人の下に病人が診て貰ひに來るこ、「ワッセルマン」反應はどうか、血壓はどの位ありますか、なぜ聞く樣になつた。血壓を測る血壓計は私共が學生の時は生理學を教示する爲めに、僅かに生理教室に一つ二つ雛型があつたものだが、今では實地臨床家日常須要の器具こなつた。其れに似て疾の診斷には少し綿密愼重を要する場合は必ず血液を見て黴毒の反應、即ち所謂「ワッセルマン」反應の有無を調べねばならぬ樣な習慣になつて來た。かゝる事は二十年前では到底考へられなかつた。手術

にしても開腹術の如きは、三十年前に於ては消毒が不完全の爲め隨分困難を感じた。先生や助手は前日から齋戒沐浴し、死力を決して行つたものであるが、今日に於ては少しく設備の完全せる所では手術室全室が容易に無毒となり、機械其他は不殘無毒であるから極めて容易に出來る樣になつた。而して痲醉の如きも、全身痲醉の如く大袈裟なものでなく單に局所痲醉で大多數の難手術が出來る樣になつた。胃腸の手術は昔は至難であつたが、今日にては腸と胃との吻合、又內臟疾患部の摘出吻合等は該專門家では殆んど皮膚表面の仕事の如き容易さを以て行はれるのである。

「レントゲン」は「レントゲン」科となつて獨立し、診斷に又治療上に廣汎、且極めて有力な働をして居るが、是を以て肺、心臟、內臟、骨等の異狀を明白に知ることが出來、治療上には血液病、皮膚病、癌、結核等に極めて有效なので內外科は勿論、產婦人科、皮膚科、其他ごの科でも「レントゲン」裝置は須要缺く可からずとして設備せられる事となつた。電氣も亦唯の平流や感傳電氣器械では面白くなくなり、筋肉や骨の內部を溫める「ヂアテルミー」が工夫せられ、更に又電氣か電氣浴として用ひられ、其他日光療法に特別の室が設けられ、又太陽光線のなき時には其代理に太陽燈が用ひられ、是れも皮膚科其他等に諸般の用を爲す事になつた。是に似て新元素の「ラジユウム」やそれから導かれたる「ラジユウムイマナチオン」が治療界に引き出さるゝ事となり、難治の瞳瘍、其他慢性病に應用せらるゝ事となつた。

以上は理學的療法であるが、化學的療法卽ち藥物療法は如何と云ふに、是は又新規無數の新藥が製造せられ又販賣せられて應接に遑なきは、日々の新聞紙の廣告に見る通である。就中近世的の藥物として最近最も人氣を博しつゝある藥物は「ヴイタミン」に關する藥物、滋養劑及び其誘導劑と而して內分泌腺に關係ある臟器劑及び其誘導劑は見逃すべからざるものである。此事は後に再び說明するであらうが、「ヴイタミン」に關する藥物は、

「ヴイタミン」、「ヴイタミノーゼ」、「ベリベリン」、「アンチベリベリン」、「オリザニン」等

臟器劑に屬するは、

「スペルマチン」、「オーフオルミン」、「ヨヒンビン」、「プツイトリン」、「チレオイヂン」等々

新規珍妙の名を以て表れて居る。其他治療劑では傳染病の治療及び豫防に必要な血淸「ワクチン」類の發展も非常なものである。是も後にお話する。

公衆衛生の進歩に就ては迚も短時間で申されぬが、大雜把に云へば水道下水の普及、それから傳染病の豫防……此豫防の事に就ては以前には種痘の外豫防注射がなかつたが、今では「コレラ」「チブス」等が發生すれば豫防注射を行ふと云ふ風であり、流感が流行すれば又豫防注射で、一年中豫防注射でうるさい程當局の催促を受ける。以て昔日の面目を改めて居る。結核や黴毒の豫防施設も着々進みつゝある。それから學校衛生の設備に就ては、あちこちに林間學校等が開かれ、其他の特殊の兒童保護事業と共に進歩せるものの一つであり、禁酒は未成年者は禁ぜられ、それから今年から勞働者保健法等も實行せられ、勞働者の疾病も折角保護せらるゝ樣になつた。衛生博覽會、其他醫事衛生の宣傳も亦驚く可く發達し、殊に近年日々の新聞にも衛生欄があり、特に婦人雜誌となると大抵のものは婦人病や小兒の疾病の事で毎號の多分を塡充して居る。

三

偖て以上の繁多繁昌なる醫學の現象、卽ち現代醫學の進歩は果して如何なる理由のものか。如何にして斯かる變化發展を來たしたか、是は近代病理の變遷を見ると大體わかる。

（一）醫學に於て疾病に關しては、六七十年來細胞病理なるものが確立し成立して居る。是は獨逸のウイルヒョー氏及其學徒が建設者で、卽ち人體の各器官の細胞が變化すると疾病をひき起すと云ふのである。故に其病的細胞の局所を摘出するか或ひは物質交換の作用にて該細胞の健全が恢復せらるれば疾病が治癒すると云ふのが細胞病理である。而して其變化を見るには屍體の解剖を行ひて病的局所を視、或は屍體、生體の病的局所の組織の切片を作り其れを染色したりして顯微鏡にかけ之を伺ふ。是が病理解剖で、斯の如くして多數學者が各臟器及其組織の變化を追及する所より、疾病の病的變化に關する智識なるものは非常に詳しきものとなり是に携さはる實地臨床家も自然各器關の疾病に就ては其生理作用等の異なるに從ひ、夫れ〴〵異つた深き智識を要求することになり、之れで年を逐ふて次第々々と細かな專門分科の臨床家を生じて今日の有樣を見るに到つたのは、一は此細胞病理なるものが大なる影響を與へたと考へることが出來る。此細胞病理は疾病の智識の土臺をなして居るのであるが、其れから輓近醫學の大潮流となれるものは、

（二）細菌學である。細菌學は獨逸の「コッホ」が泰斗であるが、我國では第一北里博士、

次に緒方博士等の努力によりて明治二十年代の始より着々輸入せられ研究せられ、我國では此學問が頗る獨立が早いのである。此細菌學の進歩で諸般の傳染病の病源や性質がよくわかり、治療法や又傳染病豫防法の進歩し來れることは御承知の通りなるが、但し此の細菌學に於ては學者が新しい細菌を發見して、其れが病源なるを證明する事は容易の事ではない。而して細菌を發見すると、其順序として如何にして之が純粹培養をなし得るやを工夫し、純粹培養を得たなれば之を動物に注射して幾度も最早其疾病に感傳せぬ迄之を行ふ。こうした試驗動物より得た血液の血清は免疫血清で、これが人間の同じ傳染病の治療液ともなり豫防液ともなる。濃きは治療液で薄きは豫防液である。細菌學者は斯く迄に研究と試驗とを重ねて初めて成功するのであるが、最初は治療血清は唯「實布的里」にしかなかつたものである。明治二十年代の中頃迄は以上の有樣であつたが、其後になつて今日に到れば今述べたと同じ方針で血清を作り得るに到り「チブス」、「赤痢」、「ペスト」、肺炎等種々の血清が出來た。其れから之に似た細菌學者の製造せる治療劑で「ワクチン」と云ふのがある。これは細菌の純粹培養をなせるものを殺して食鹽なり石炭酸水に溶かした其浮遊液を注射して傳染病の免疫を得せしむるのであるが、之は重に傳染病の豫防液に用ひらる。「膓チブス」、「パラチフス」、「流感」、「腦脊髓膜炎」等の豫防となる。獨り豫防のみならず其製法に依つては治療液ともなる、製法の中に前述べた細菌の浮遊液を生理的食鹽水や石炭水に溶かす代りに同じ傳染病の免疫血清に溶かして作つたものがある。之は「感作ワクチン」と云ふので其の效果は前者に比し用ふる場合に從つて優劣がある。或は種々の菌を混じて作れるのが「混合ワクチン」で、菌を煮沸して濾過せるが「煮沸ワクチン」で、其他製法により種々の名の「ワクチン」がある。斯の如くにして本邦に於て製造せらる「ワクチン」及び「感作ワクチン」の種類は六十種以上もあり、獨り官立の傳染病研究所よりのみならず、あちこちの私立研究所からも盛に製造せられ其效果の優劣を爭つて販賣せらるゝ樣になつた。販賣に就ては政府は其濃度や價格に一定の規定を設くるの要ある迄になつた。前述の血清も亦其れと同時に多種のものが盛んに製造販賣せらる。其爲に政府の血清類販賣規程と云ふものが出來たのである。近時何々血清、何々「ワクチン」或は何々「感作ワクチン」と稱して、吾人の疾病の豫防治療に效益を與へつゝあるものは蓋し近世的のものである。但し近時の病理は以上の細胞病理說や細菌學說を以て滿足するものでない。次に、近來旺に唱導せられ、醫學に大影響を

起しつゝあるは、

（三）ヴイタミン説である。ヴイタミンBの缺乏は脚氣の症狀を表すなど、云ふのは此事で此「ヴイタミン」の研究は英國の「ホプキン氏」により一九一〇年頃より唱へられたので、身體を維持するには從來知れわたれる榮養素、脂肪、蛋白質、含水炭素、食鹽等の外に更に生命の維持に必要不可缺な榮養素がある。それが「ヴイタミン」と名づけられたので、此物は身體内に自然と出來る物質でなく食物より攝取して生ずるもので、其作用は身體の細胞を燃燒するか、或ひは醱酵作用を促すとか身體の新陳代謝に大切な影響を有する。而して此物質は化學反應で證明が出來ず單に動物試驗によりて之を確むるのである。而して此物質中脂肪に溶解するのが「ヴイタミンA」で、水に溶解するものは「ヴイタミンB」、血液の壞敗に對抗する特殊のものは「ヴイタミンC」其他「ヴイタミンD」等が種別せらる。此等の「ヴイタミン」の缺乏せる狀態は「アヴイタミノーゼ」と名づけ、其狀態になると色々な疾病が起る。例へば眼病（結膜乾燥症）脚氣壞血病、其他榮養不良の狀態に陷るのである。つまり新陳代謝が悪くなるからである。「ヴイタミンB」の缺乏は脚氣に似た症候をひき起すのであるが、此「ヴイタミンB」は米の糠の中に含まれてゐる。純白の白米のみで雞を飼養すると、所謂白米病と名ける脚氣と殆んど同樣の病を起す。「ヴイタミンB」の缺乏と脚氣病との關係に就ては政府で設けた脚氣研究會があり、又一昨年の如きは世界の熱帶病醫學會が日本に於て開かれ、脚氣の原因、治療、豫防が考究せられたが、日本は世界中脚氣流行の本場とも云ふべきで、研究は極めて大袈裟且つ愼重になつて居る。前記の萬國熱帶醫學會で脚氣の豫防に白米は今後何ブロ迄白くすべきかと迄の法律的の提案が出たが議決に至らず保留せられた。其處で此「ヴイタミン」の缺乏症、營養不良や脚氣等の治療及び豫防に多量の「ヴイタミン」を含む所の營養劑や治療劑が澤山出來た。「糠エッキス」、「コルンエキス」、「オリザニン」、「アンチベリビリン」、「ベリカイン」、「ベリベロール」、「ネオビリン」「ヴイタミノール」、「ヴイタミノーゼ」、「ヴイタモーゲン」等々、「ヴイタミン」製劑、その誘導劑、其分解劑は誠に全盛で頗る近世的のものとなり、獨り一定の「ヴイタミン」缺乏症と銘の打つたる疾病でなくても、不明の營養不良の狀態には臨床家は直ちに思ひ出して「ヴイタミン」を用ゆるの傾向を生じた。

此「ヴイタミン」の事と並列して述ぶべきは營養研究所の設立である。其處の使命は「ヴイタ

ミン」の研究は勿論だが、如何にして國民に最も安價で最も滋養多き食物(何カロリー)を與へ得るかの獻立等を敎へるのが重なものになつて居るが、これは榮養問題が世界各國八ケ釜敷なつて來たと同時に我國に生れた特殊の研究所で、大戰の賜、醫學の一進步と云はねばならぬ。

今や「ヴィタミン」說は慥かに醫學の一大勢力ではあるが、併し此物よりは恐らく尙々重要で、近時全醫學を改造せんとしつゝあるものがある……其は(四)內分泌說である。

內分泌は內分泌腺の營む所であるが、內分泌腺とは御案內の通り甲狀腺、腦下垂體、胸腺、副腎等を云ふのであり、「ホルモン」と稱する分泌素を分泌するのであるが、腺よりは外部への開口部がなく分泌物は組織或は血液中に這入る。此「ホルモン」なるものゝ作用が頗る奇妙である。今甲狀腺が肥大增殖すると精神上にも變化を及ぼし癲癇持或は神經質となつたり、又手が震つたりする。反對に萎縮すると身體の發育が惡く皮膚が水腫を呈し、精神は記憶減退、痴鈍狀となる。副腎の髓質より分泌する「アドレナリン」は血管に分布する神經を刺戟し血行を良くする。副腎が惡いと皮膚が赤銅色となり、精神は無元氣無慾狀となる。其れから此等の內分泌腺は一つが働くと他も之に伴ひて働き、又一つが働を止めると他がそれを補ふて働く等、代償相殺等頗る複雜な關係のあるものである。此「ホルモン」の作用と連絡して頗る重要なる位置を占むるものは、植物性神經系統(交感神經と副交感神經或は迷走神經)である、是が內分泌素にて刺戟されると、或る神經には促進的に、或神經には制止的に働くのである。例へば「アドレナリン」が交感神經に働くと心臟の作用は早くなるも、副交感神經に同時に働きて其促進作用を制止するから心臟の働が平衡を得るのである。かゝる風で神經作用を調節する故に、內分泌に障礙が起り長く續けば、つまり血行のみの關係に就て見るも生命を保つことが出來ぬ。此內分泌と植物系神經系統と腦髓との關係は最も興味のあるものである。是等の關係よりして精神現象も餘程明かとなり、爽快とは如何なる狀態であるかと云ふが如き事も次第に明瞭となりつゝある。例へば從來より智力の方面は大腦皮質の作用として見做れてあつたが、今日に於ては感情の方は主として大腦の下部、卽ち腦幹の方及び內分泌對交感神經(此三つの物)が密接なる關係ありとして說明せらるゝことになつて居る。其他腦下垂體の働が進むときには骨端の發育は太くなる。つまり內分泌は血行、物質交換、身體の發育、精神機能の發育に重大なる關係があるのである。斯くの如くして內分泌腺に障礙の起る時には其結果、身體や精神發育を害し、

或は物質交換に變化を起して病的になる事からして、內分泌腺より分泌する「ホルモン」に擬せる藥品が澤山出來た。解り易く云へば其等の「ホルモン」劑によりて身體精神發育の缺陷や物質代謝病を救ふのである。其一つには例へば馬鹿につける藥が出來た譯である。其等藥品は何れも前に述べた內分泌腺より作るのであるから一に之を臟器劑と云ふ。甲狀腺より作りたるは、「チレオイド」、「チレオイジン」、「チラーヂン」腦下垂體よりは「プチイトレン」、「プチロビン」睪丸よりは「スペルマチン」、「オルヒス錠」卵巢よりは「オオフォルミン」、「ルテイノール」、膵臟よりは「インシユリン」等々、實に無數、臟器劑全盛である。

現在に於ては學者の內分泌に對する研究は甚だ盛んだが、將來は尙一層刮目に價すべき發展を見るであらう。例へば同じ細菌、同じき病氣でも死ぬと死なぬとは體質に由るものなりと云はるゝが、此體質の觀念は今では內分泌說に依つて餘程改つて來たが、今後は一層改造されることであらう。全くの處輓近細胞病理より細菌說、近頃では「ヴイタミン」說「ホルモン」說は順々に勃興し旺盛を極めつゝあるが、傍ら物理療法、「レントゲン」、「デアテルミー」、「ラディユム」等に據る物理療法の進步も見逃すことは出來ぬ。

但し一面は斯く盛んだが、遺傳の事の如きは往々學說はあるけれども、弘く都合の好い實地應用迄にはまだ中々出掛けてをらぬ。それの進步は今後を俟つべきであらう。獨逸邊りでは遺傳學者はあるけれども日本ではあまり見えぬ。それから尙茲に云つて置きたいのは以上の如く現時の醫學は解剖組織の研究を基礎とし、それに藥物や理學療法、卽ち理化學療法は非常に盛んで殆んど寸尺の餘地なき有樣なるは以上述ぶる如くなるが、併し人間の精神、主觀に立至りて研究し、疾病の精神作用より起る原因や或ひは疾病の精神療法と云ふ方は、一部の精神神經病學者よりは有力に唱導せられて居るけれども、まだ全醫學を支配するに至らぬ。其れで精神療法家は勿論、醫師に非ずとも有識なる階級者に於ては、現代の醫學は單に物質及び理化學療法にのみ偏して居るから、動物の醫學で人間の醫學ではない。人間の主觀なるものをば少しも顧慮して吳れないとの歎聲を發するものあるは尤もの次第で、現時醫學の一大缺點と云はねばならぬ。併し近時になつては前云つた如き內分泌說など出て精神と身體との關係に於て新しき事實が着々わかり、各科の臨床家も疾病の精神原因や、疾病の精神作用に因る治療法の方面に餘程注意して來れる樣であるから、精神療法の如きは是からが大いに面目を改むるであらう。

つまり物質と主觀とを兼備具有せる完全なる醫學は是より大いに勃興し、而して民人に幸福を與へねばならぬ。

四

以上は日本醫學の現狀であるが、現在の醫學の現象及び其由つて來る所の病理の變遷を述べたのであるが、今や日本の醫學は世界一流國より見て餘り劣れる所はない樣になつた。だが併し他國の長所を見るならば中々及ばぬ點が尠くはない。獨逸は日本醫學の本家で恐らく世界醫學學術の本元であるが、世界大戰の結果一時其進步は頓挫した。併し最近には著々復興して勢ひ侮るべからざるものがある。獨逸に於ては國勢を輓回し償金を支拂ふに一に學術科學の力を俟つより外はないと信じて居る國柄であるから、國民の科學を尊重するの念は決して學者を美術品か骨董品扱ひにする東洋流の樣な事はない。眞劍である。其れで今や盛んに各種の工業等を起し製品を產出し、傍ら節儉と相俟つて富を作るを念とし、醫學の方面では盛んに新藥を作つて各國に販賣して居る樣であるが、其處で注意させられるのは新しい工場が建つ場合、ごんな處でも其豫算に研究室、或は研究費幾何と云ふ尠からざる額が含まるのである。最も良き品物を最も安價に且多量に製產するには常に技師の工夫、改良、研究を要するのである。此一事で以て科學を尊重する國風がすぐわかる。其勢の侮るべからざるものありとは最近視察者の報告である。其れから米國では、醫學の研究室の規模や其設備などを見ると、大體日本より劣つて居るとも優る事なき樣であるが、併し足一步研究室外に出れば其學術の應用及び其普遍なるに驚くと云ふ關係になつて居る。例へば各都市の上水下水の進步は勿論、殊に結核の豫防其他諸般の衞生施設は日本よりは遙かに進步して居る。是れ勿論彼の國の富にも關係するが、一は又國風である。禁酒國は他にもあるが廣大なる一國を擧げて禁酒令を嚴行するなどは、兎も角も甚だ理想的であり、衞生の進步である。十二指腸虫や蛔虫などの寄生虫卵を有するものは入國禁止と云ふ如きは、極めて大仕掛な他國の模擬し得ざる施設である。サンガー夫人の產兒制限論と其技術の宣傳の如きは兎も角も世界的である。其他ロックヘラー財團が世界著名の醫學研究者に研究費を與へ、或ひは各國の研究室に研究費を寄附する如きは世界的有名のものである。其れから佛蘭西の醫育になると是又參考になる。日本に於ては醫學教育は獨逸流で、基礎醫學解剖生理より始め、其れから臨床實地醫學の順で學ぶのであるが、佛國では何も知らぬ一

年生より患者を取扱つて基礎科の智識も臨床學の智識も一時に混亂して這入る樣であるが、一二年の後、成書を讀み講義を聞き、始めて系統立ちたる確たる智識を得る。之が自然教育法と云ふのである。佛國に於ては、醫學のみならず其他に於て天才的の業蹟が出る。而して之を大成するのが、獨逸と云ふ風であるが、此天才的獨創的の業蹟は其國民性にもよるが一は其教育法に關係なきやと思はる。其他土地柄が適當なので、瑞西では結核療養所が進歩しており、英國では英吉利斯病、骨の軟化する病氣が多くて、其本場たる關係上、其の方の疾病の研究は進んで居る等々、見るべく聞くべきものが未だ澤山ある。

五

之を要するに日本醫學は最近五六十年、一に獨逸醫學を輸入して發展し來つた。初め三十年位の長き間は細菌學の外、學術は餘り多く獨立の氣勢を見せなかつたが、大戰以後に於ては、めつきりと各科の研究の獨立性が高まつた。以前には醫學の研究的仕事は獨逸に留學しなければ出來なかつたが、今は各大學の各研究室に於て盛んに動物試驗、理化學試驗によつて研究して居る。從つて以前は博士になるには洋行するより外なかつたが、今は自國で研究が出來、其業蹟により一日に殆んど一人の博士を出す割合の盛運に達して居る。其れで各科聯合の醫學大會の開かれ、演題の二千もある中で其最大部分は何なりやと云ふに、實に基礎研究の末節の末節とも云ふべきもの許りで、日常必要なる診斷なり治療なり衞生なりに餘りに緣故の遠いものばかりであるから、大會の首腦部邊に於ては大會毎に業蹟の課題は、成るべく實地應用に近きものとの希望が問題になつており、而して其學風の針路の改善が聲言せられつゝある。是につけても懷ふことは　新帝陛下の宣へる日々に新なれ特に模倣を去りて獨創を重んぜらる御趣旨の詔勅は一般國民誰人にもなるが、殊に學者に取りては最も感仰し、最も眷服すべき緘言として見奉るべきである。現時醫學は大いに獨立の氣勢を現はして居ると云ふものの、其實は其研究術式や大原則は大抵皆歐米人の法則に從ひつゝあるもので、格別何が世界學界を風靡し、どんな學風が各國を率ひると云つたものはない。でこれからは學者は勿論一般國民も同じく出來るだけ外國文明の模倣を避け、獨創を重んずるのでなければ、決して一流國として國威國運を顯揚する所以でない。この獨創には學理の獨創もあり、應用の獨創もあるので、何處に行つても獨創と云ふ貴き價値のあるものは伴つておる。而して學者が學理を發明したればとて、民衆

は之を聞き得る耳を持たなければならぬ。然らざれば一國の文明は高まらぬ。殊に例へば公衆衛生施設の如きが夫れである。

されば學理の尊重、殊に其れの應用の成否、適不當、普遍如何は一に一般民人の醫事衛生的智識の理解にありと云はねばならぬ。

長々しき蕪言、聊か醫事衛生的文化運動の一端ともならば誠に光榮と存じます。

體質と性格の話

（昭和二年八月二十一日於山形縣藤島町）

私は度々庄内には參りましたが、當町に參りますのは丁度三十年目位であります。本日は炎天にも拘らず不肖の話を聞きに御出下されしことは光榮の至りであります。是から御話し仕樣と致しますのは、如何なる體質の人に如何なる性格があるかと云ふ問題であります。現今小學校等に就て觀察して見ますに、一方には體格驗査があつて體格を調べ、他方には性行表などあつて、精神狀態を調べて居りますが、併し此體格と性格とが如何なる連絡を有するかと云ふことは未だ閑却されて居る樣に見ゆる。即ち體格に關しこれには如何なる性格を伴ふかと云ふことを御話致すのでありますが、今後是等に就て大發見でもあり、其れが利用せらるゝといふ風になれば非常に良いのですが、今は未だそうもなりません、まだ研究中のものであります。今回の講演で酒田では醫學一般についてお話し、鶴岡では稍々專門的なる精神の肉體に及ぼす影響に就てお話したのですが、此處の問題は自分にとりては近頃一番專門的なのであります。而して今日お話するのは病者ではなく、健康者を對象とするのであります。其御積りに。……而して研究未完成のものであります。精神と肉體との關係に就いては、近年内分泌の研究が進み之と精神及肉體との關係に就て新なる説明の方面が開けて來ました。今までの如く精神作用は單に大腦の作用のみに歸せず、其の他身體には一種の物質があり、即ち内分泌腺より分泌する所の「ホルモン」と稱する物質があり、其れが腦に働きては恰恍にも遲鈍にもなれば、更に其物質は傍ら又かの植物性神經系統に働き、つまり爽快、陰鬱、苦悶などと關係ある事が明かとなりつゝある。即ち從來の標語では「腦髓即ち精神」であつたが近頃では身體物質即ち「精神」と云ふ樣な見解になつて來た。内分泌とは甲狀腺と腦下垂體、副腎、胸腺、睾丸等から分泌され

る分泌物を云ふのでありますが、此者の作用は從來は甚だ不明でありましたが、今日では盛んに研究されてゐる。此物質の中に「ホルモン」卽ち分泌素とも云ふべき大切なものがありまして組織及血液中に入るのである。これが外部に出ぬと云ふ理由で內分泌と云ふのである。この「ホルモン」が他方に於ては植物性神經系統、卽ち交感神經及副交感神經を刺戟し其作用を促進し或ひは抑止するのである。人間は大腦皮質の作用によつて思考作用を行ふのであるが、感情(例へば快、不快、喜怒、哀樂等)の發生に就いては是迄は明瞭でなかつた。內分泌說では感情は「ホルモン」の作用と密接なる關係あることが漸次明瞭となりつゝある。內分泌の作用は頗るデリケートなのである。例へば甲狀腺が肥大すると人間が過敏となり、萎縮すると痴愚となる。腦下垂體が肥大すると肢端肥大症と稱して手足の關節が特に大きなる疾病を起す。これが萎縮すると大人も小兒の如く、身體の發育が止まり、精神も又其樣に小兒の樣になる。卽ち「ホルモン」は人間の成長に關係があり、精神の發達消長にも大關係があるのである。副腎の肥大は生殖腺の發育を助け促し、分泌が止めば皮膚は銅色となり痴鈍となる。又睪丸や卵巢に支障を來たせば其れが子供である程、身體の發育を障礙する。又中年になつて睪丸が病氣で失はれた樣な場合には、手足の發育が長くなり、陰部にはありし毛もなくなり、脂肪肥りとなることがある。支那にあつた宦官等は全く此の好例である。彼等は身は細長くなり、氣持も女みたい樣になる。精神と身體との關係を考へますに、人相見などは、外貌と內心とよく考へて居りますが、生理作用等は彼等は了解して居らぬ。夜店で人相見の持つてる腦の圖解等は、今日では到底當にならぬものである。是に就いては獨逸のクレッツメルと云ふ哲學者兼精神病學者の研究して居るやり方が面白い。其れは前云つた樣な見地の醫學上より體質を見、而して又精神病學上より精神の有樣を精察し調べたのであるが、私も亦同じ方針の下に少々常々觀察して居り、又日本人と獨逸人と比較して見た。先づ外貌に就て言へば大別して、

一、肥滿型　甲
二、羸瘦型
三、鬪士型　乙
四、發育異常型

となる。其委しき標徵は略するも、(一)は丸味を帶び、脂肪に富み身體の釣合よきもの、(二)

は身長が高く手足胴が細長く出來て居り、(三)は力士型卽ち仁王の樣に筋骨逞しく太く出來て居る、(四)は文字の示す通り一見して片輪に見ゆる體格が其れである。身體は小兒の如く小さく或は不釣合に手足に長短ある等である。(一)は內分泌の異常なく其他には比較的是れがあるのである。甲に現れる性格と乙に現はれる性格には一定の型がある。茲に性格と云ひ氣質と云ひ其辭義や事柄には心理學上には種々なる說明があるが、そんな事には今日は深入りせずに單に氣質は個人の感情素質の現れで、性格は感情及び意志の現れとして置きます。甲は爽快から悲哀迄の間にそれぞれの傾はあるが、その感情が平で何時も平均して居る。乙は精神が過敏である。これは程度によつて相違があり極端になると無感覺で殆んど同情心を有せぬと云ふ風にもなる。甲は爽快或は悲哀、或は靜平の氣分であるが、乙は感覺性の過敏の程度によつて階級が違ふ。甲は精神作用が立派な曲線をなしてすゝみ、觀念感情が圓々とすゝむ。乙の方はその進み方に急激な高底がある。甲の人は外貌通りの人で、心の內外に大した表裏がない。乙の方は所謂氣の知れぬ人である。甲の人は挨拶もよく、乙の人は之と反對である。甲は社交性が多分にあり、乙の人は之を嫌ひ、默つてゐる方が氣に合ふといふ風である。孤獨で居る方が都合よく他から見ると「グツグツ」してゐる樣だが、自分にはその方が都合がよいのである。甲は誰れ人でも友を選ばぬが、乙は少數の好きな人とは所謂莫逆とか刎頸の交をする。甲は何事物となく博く見るも、乙は偏頗である。甲の人は物の考へ方が具體的で、乙に於ては論理的で深刻なのが多い。甲は社會に立つて實際家となるに良く、乙は理想家に適し、甲は現實主義、乙には理想家が多い。信仰に就いて云へば、甲は神佛はあつても無くともよいと考へる位のあつさりした信仰であるのに、乙は熱狂的となる。天理敎等に凝り固るのはこの乙の人である。甲は活動する方が好きで、現實主義だから自然此種の人には享樂主義で暢氣過ぎるものが多く、乙の方では机上の空論から世界を動かさうといふ風の事を考へる。甲は怒つても夕立の如くぢきに晴れ、乙はそうはいかぬ。かゝる氣質の人々が社會に出て藝術家になつたりする上に起る傾向は、皆それぐの特色を現はすのである。詩を作る如き藝術家では、甲は寫實主義で滑稽味を有し、乙の人は悲哀小說の如きものを作る。甲の寫實には一定の人生觀がない。乙の方は論理はあるが內容が少い。學者になると、甲は具體的經驗的記述的のものが長所で、今日の醫學卽ち萬有學等が是れに適するが、乙の方は論理家、數學家、統計作成家、哲

學者などが向くのである。甲の方は該博な智識を有するが(例へばゲーテは其傾向ありとする)深くは行かぬ。ゲーテは甲の型、シルレルは乙の方の型である。シルレルはゲーテを評して、「お前はあまりに物を按觸する事を好む」と云つたが此語兩者の性質を知り得るのである。シルレルは、又「餘りに該博な智識ある者は一焦點に全力を注ぐことを知らぬ」と云つた。乙の方は言語技術に長けて居り、音調も旋律も頗る立派だが、その内容は愛を缺き、温か味がない。甲は之に反してゐる。甲には妥協的の政治家(例へば野田大塊翁や、ダルマ宰相の如き)が出來るが、乙の方には理想的な立派な政治家が出來る。併し時としては暴君も出來る。さて以上述ぶる所は體質と性格との關係であるが、此一般の性質の中、甲の内には享樂が重なるあり、或は暢氣が重なるあり、甲には索居離群の學者生活や、或は單に冷情で打算が主なる打算家等、種々の小別けの型はあるが、其等は略するとして、偖て今云つた如き體質と性格とは何時でも完全に一致するかと云ふと、そう簡單には行かぬ。是には未だ他の要素が含まれてゐるのである。夫は遺傳である。遺傳學に於て研究せられたる所に於ては、

一、混　合

二、雜　交

三、優性轉換

などと稱する事實がある。(一)は父母の一部分づゝに似て居り、これは性質外貌共に然り、(二)は身體は父と似てゐるが、心は母と似た樣な場合、(三)は十四、五歳位迄は或る點は身心共に母と似てゐるが成長するとそれが父に餘計似てくると云ふ樣な場合である。而して身體構造が變化すると氣質にも變更を來し、悲觀主義が樂觀に變つたりする。斯くして遺傳の事實をも加へて本人の身心狀態を調査すると、體質性格の關聯は餘程よく判つてくる。但しそれでも今日の處全部が判つて來たと云ふのではない、まだ〳〵研究を要する點が多々あるのである。斯樣にして生理學上より身體の構造を見、而して其影響して來る精神の素質を研究するのを生物學的氣質論、或は生物學的性格論などゝ云ふ稱呼の下に、研究せられつゝあるのである。今年私も京都醫學會で之に關係した經驗を報告したが、斯ふした研究は前に云つた獨逸のクレッツメル氏が盛に宣傳して居り同樣の問題に就て、今や世界中五十人もの專門學者が研究しており、調査せられたる人間の數は五千人以上にも及んでゐる。かく研究中なるも從來の一般の心理學者

教育者等に於ては身體と精神を別々に取扱ひ、身體構造と精神の氣質乃至性格と關聯を明かにするの觀察を缺いて居た。此兩者を相結合して見る所の見方は、今後益々進歩するであらう。

但し此研究法は單に漠然多數の人間を調べて其結果を得たと云ふのではなく、深き根據より生じ來れるものである。つまり精神病者より推究して健康な人に及んだので、今其れを一寸云つて見ると、精神病者の中、中毒や細菌等の外因に依らずして內因性に起るのが種々あるので此內因性の疾病は遺傳や、體質に關係して起るのである。其內因性の主なる疾病は躁鬱病と早發性痴呆(一名乖離症)と稱する名のものであるが、斯ふ云ふ病氣を起す人の健康時の氣質を調べて見るの外、又其血族を調べて見るとそれ〴〵特徵がある。而して其體質を見ると、肥滿型は躁鬱病に殆んど特有的で、羸瘦型や鬪士型又は發育異常型が乖離症に非常に多いのである。而してそれ〴〵の體格者は健康時にそれ〴〵一定の性格を備へて居る。それで前に甲乙と別けたが、甲者の性格は躁鬱病より導いて來たから、原研究者は躁鬱氣質と云ふ名稱を與へ、乙は乖離症より導き來れる故、乖離氣質と云ふ名稱を與へたのである。其等凡て委しき說明は略するが、斯ふした標準からして精神病に全く關係なき健康者を捉へ來つて其體格及び性格を研究し、進んでは天才にも及んだのであつて皆一致する處があるのである。以上の方法で人の個性を求めるといふ風になると、餘程今迄でとは趣を異にしてくる。先づ一個人の體質を見、氣質を見ると云ふと、或る者は大層快活な氣分を有してゐたのが、時としては或はひどく沈鬱となり、病的になる樣のこともあり、或は天才の如きも表面の仕事や生活が非常に立派でも、私生活では精神病の如きもあり、而して其體格の如きも著しく異常なのがある。殊に血族には精神病者などを見ることが多い。かくして個性が明瞭となれば、衛生上に注意するとか、社會上、歷史上に大變動を來すと云ふ事になる。人間に於ては兎角甲は乙の心を理解する事が出來ず、自分と同じだと思ふからお互に了解せられない。故に他の人の個性が明瞭となるならば爭論や喧嘩の必要もなくなる。卽ち精神生活の理解と云ふことが大切である。例へば最近に組織せられた日獨文化協會といふのがある。その主要なる使命の一は兩國人間の精神生活の相互の理解と云ふのであるが、吾人に於ては結局は到底人間は理解せられぬと云ふ事はないと思ふのである。國柄もあり歷史習慣もあり、人種もあり、一樣ではないが仔細に研究し、甲乙と云ふ風に性格がきまれば理解が出來得ると思ふ。其協會の理事長たる哲學士グンデルト氏は二十年も日

本人と交つてゐるが、中々ごうしても諒解せられぬ點があると云つてゐる。その諒解せられぬ點は何處にあるか私は聞き度いと思つてゐる。是で私の講演は終りと致します。（終）

（附）忘れもせず其後九月十四日都下暴風雨の日、予は初めてグンデルト氏を東京麹町區平河町の同協會に訪ひ快談時餘、獲る處尠からず。但し天機漏すべからずとなす。呵々。

實用精神療法（終）

昭和三年三月十五日印刷
昭和三年三月二十日發行

正價金貳圓五拾錢

實用精神療法

著作者　石川貞吉
印刷者　京都市壬生川通五條下ル　藤澤淨圓
發行者　京都市河原町二條下ル　渡邊久吉

發行所　京都市河原町二條下ル　人文書院
電話上一八四八番・振替（東京二六四五九番　大阪八二六三番）

心靈叢書第五編

疾病と養生 白隱と夜船閑話

第八版 好評

醫學博士 小酒井不木先生序 ― 野村瑞城氏著 ―

定價金壹圓五拾錢 送料金拾六錢

すべて人間の體驗を述べた記錄ほど尊いものはない。白隱のやうな偉大なる人格者の體驗記錄は其の惱みが大きかつただけそれだけ讀む者の心を引つけずには措かない。**私は世の難治の病になやむ患者が一日も早くこの書を讀んで**一日も早く其心に賴り、もつて白隱の如くみごとに病魔を驅逐してほしいと希つてやまない。（小酒井博士序文の一節）

禪門中興の祖と云はれ宗教意識の博大だつた白隱禪師が療病の體驗を錄した「夜船閑話」は古來幾多の人々には讀まれてはゐるが、たゞ「素人」には禪的語錄に似て詞句に難解な點があるのと感覺本位の思想が一般を支配してゐる現時**內觀の秘法**を說いた之が動もすれば閑却される風がある。それで此**尊むべき古聖の養生方法**を一般に普及せしむべく本文と對照して現代語に譯し、平易なる註解を施すと共に新らしい眼で**白隱の體得底**を眺めつゝ「**この方法で病が治らなかつたら斯く云ふ老僧の首を斬つてもよい**」と白隱が自ら保證した療病養生の方法を講述し**靈の活きたる力は病める肉體を復活せしめる所以を說いて**剩す所がない。更に附するに白隱の風格、逸話等を以てするの外**益軒、楊山、篤胤、元貞等**の養心法を述べて本文と照應せしめてゐる。

重版 原始人性と文化

文學博士 福來友吉氏卷頭論文 ― 野村瑞城氏著 ―

定價金壹圓 送料金拾六錢

心靈の要求と日本人の生活を語る快著

シャーマンと日本の神道、日本人と太陽トーテムの因緣を說き、原始人が萬物に「精氣」があるとしたアニミズムと電子說とを比較し且それが現代の神祕主義だと云ひ、動物崇拜、生殖器崇拜の奇習に潛む靈的意味を探り、古代の精靈感と現代の新哲學とを對比し小說よりも面白く、**鋭き本能が靈的統一されて眞の文化は生きるへ**」なる字句はまた貴重なる文獻である。日本心靈學會々長 **渡邊藤交氏序** ― 日本心靈學會編輯主任 **野村瑞城氏著** ―

定價金壹圓五拾錢 送料金拾六錢

四版 靈の活用と治病

治病上如何にして靈を活用すべきか？

醫家に支拂ふ一日の藥價を此書のために投ぜよ。されば神藥にも勝る治心療病法を握り得べし。如何はしき靈術屋の所謂祕傳書に勝る、此書は此意味に於て天下至廉の書（著者）

「人の生き方と物心」「人性の能力と疾病」「靈的治病作用」の三篇を更に十七章に分ち靈力を驅使活用して疾病の治るべき理論と方法を明示する。斷じて非學問的なる述作ではなく著者の研究と經驗の披瀝である。病者のみならず健康者も亦之を讀め！

京都帝國大學教授醫學博士　今村新吉氏著

三版

神經衰弱とヒステリーの治療法

人間の心理及異常心理を通じ神經衰弱とヒステリー患者の姿を凝視しつゝ深き神經學的知識を以て其原因と症候を解釋し進んで治療法に及ぶ。著者は帝大教授にして現に大學病院長を兼ねられ現代日本に於ける神經系學界のオーソリチーたるは何人も知る所。而も**博士の學說と療法を完全に知るには本書を措いて他にはない。**卽ち絕對に信賴すべき治療書にして同時に基準的指導書としても推薦するに憚らぬ。

第三高等學校教授　文學士　平田元吉氏著

再版

近代心靈學

心靈問題を科學的に取扱つた此書は先づ近代心靈說の紀元及び略史より筆を起し精神感應の理より幽界の消息に亙り靈の生活實存の新證據たる所謂交互適應に及び更に心靈の物理現象より心靈の物質化を說き**三編二十餘項に分ちて解說される。**著者平田教授は十有七年間熱心に心靈學を研究し殊に英獨兩國語に精通し歐米の文獻に涉獵さるゝことの深きは本邦學界屈指の人である

定價金壹圓五拾錢　送料金拾六錢

博士の學說と其獨特なる療法は此書によりて知るを得

定價金貳圓參拾錢　送料金拾八錢

心靈學の何たるかを知らんとする人は先づ此書を讀め

文學博士　福來友吉氏著

五版

精神統一の心理

精神は統一せなければならぬ、精神を統一すれば不思議な働きが出來ると云ふやうに何人も屢々精神統一と言ふが而も精神統一の意義及その心理を正しく把握するものが幾人あるか。此統一の絕妙境を學術的にそして平易に講述された本書は心理學にして同時に哲學であり生物學生理學とも交涉を保ちつゝ**統一されたる精神の偉力と又統一方法を講じ**幾多の實例實驗を擧げて**先人未唱の一大新案**が下されてある。卽ち此書に於て何人も統一の妙趣を知ることが出來る。

日本心靈學會々長　渡邊藤交氏監修　日本心靈編輯部著

定價金壹圓五拾錢　送料金拾六錢

實參透脫統一境如是の消息は博士によりて開示さる

增補五版

靈の神秘力と病氣

本書を讀んだゞけでも病氣が半ば快癒したと云つた慢性病者のあるに徵しても其內容が窺はれると信ず。病氣の意義を解明し現在の生理學病理學を檢討し病氣と心靈力の關係を明示し更に信仰關係を眺め進んで衛生治療學の革新を叫び一轉し**病氣の發生と治癒の上に働けかける心靈力の神秘**を公平な立場に於て叙述した一書。病患治療に從ふ人、健康を望む人、病氣に惱む人々は本書によりて得る所、慰めらるゝ所、啓發さるゝ所が多いと信ずる。

初版刊行以來重版又重版した本書は新研究を採り入れ增補第五版を出した

文學博士　福來友吉氏著

四版

觀念は生物なり

定價金貳圓八拾錢
送料金拾八錢

福來博士曰く
微妙靈通なる純粹精神は觀念化して初めて肉體に作用する力を持つ

觀念は力であるとは學士の博說の基本となる主張である。觀念卽ち心は力であり生物であるが故に色々の事が出來、色々の現象が生ずるのであるとの理を各種の實例をあげて通俗的に述べられた。此書を讀んで心の力を語るべし。眞に學界無比の神秘的心理學の教科書である。

內容一班——▲觀念と身體との關係▲我能力と人性▲動物主義▲夢▲潛在精神▲祕密と心の病氣▲プランセットの話▲模倣性と病的傳染▲精神的養生▲精神の虛實▲宮本武藏の劍道▲念寫の研究▲生命學と心靈研究（各章十數節渾然として一體系をなす）

醫學博士　小酒井不木氏著

八版

慢性病治療術

定價金貳圓五拾錢
送料金拾八錢

癈病醫界に一大センセーションを起した革命的療病說を盛る

著者小酒井博士の體驗と醫學的知見と今人古人の經驗と且つ思索とを織り交ぜつゝ慢性病治癒の原理と神髓を說き慢性病者が藥劑、入院、轉地、注射等と焦躁すればする程に重患になる所以と何等の費用を要せず又むつかしい方法や手數をかけない所に慢性病を治す第一の鍵が置かれてあることを親切に敎へられる。本書はまさしく生きたる仁術の書！

京都帝國大學敎授醫學博士　今村新吉氏講述

再版

神經衰弱に就て

定價金六拾錢
送料金拾四錢

患者と治療家と醫家の迷妄を打破せる通俗講座の公開

恐迫觀念から神經衰弱とヒステリー症に及び博士が專門の精神病學は勿論、心理學に觸れ或は臨床上の實驗を以てし患者と治療家と醫家の迷妄を打破する。大册ではないが博士の學說の要を摘み、通俗に嚙み碎かれたる講座の公開とも云ふべく神經病治療家の指導書にして且つまた一般人士が修養の資針である。

日本心靈學會々長　渡邊藤交氏監修　日本心靈編輯部著

三版

病は氣からの新研究

定價金壹圓五拾錢
送料金拾六錢

俗諺「病は氣から」の鐵則に正しい斷案を下し眞に新研究の名に背かず…

諺に謂ふ「病は氣から」とは永久の眞理である。此理を科學的知識を經とし東洋意識の靈趣に由來する病理說を緯として縱橫に解說したのが此書である。卽ち人體の作用から各器官の生理病理を語り進んで各器官に及ぼす精神作用を詳述し更に臨床醫術の土に新らしい境地を拓いた內分泌說、精神作用と密接に交涉すると云ふ植物性神經機能の新學說を解剖し「氣」の正體を科學的に心靈學的に究明したるもの、特異なる療病醫學書としてあらゆる人々が一讀再讀されんことを勸むるに躊躇せない。

東京帝國大學教授 醫學博士 永井潛氏著 ▽富田溪仙畫伯裝幀

定價金貳圓五拾錢 送料金拾八錢

重版

人及び人の力

科學的唯心論者の權威ある生理學說を盛る

自然科學から出でた精神主義者たる著者が人の生命の尊貴なる事及び人には斯くの如き力を具有するといふ事を生活現象に卽しつゝ說かる。或は生命の思想變遷の歷程を論じ或は醫學と哲學の交涉を究明し或は遺傳の學理を述べ或は健康法を講じ或は不老長生、體育、兩性相關の妙趣を解する等十五章。生理學界の權威者たる著者の全研究が通俗化して大衆に解放される。

醫學博士 小酒井不木氏序論 ‖ 野村瑞城氏著

定價金貳圓五拾錢 送料金拾八錢

重版

民間療法と民間藥

民間療法に奇効ある理の解釋と民間藥秘傳藥の公開と手輕な應用法

長い〳〵間の經驗によりて知られた療病法卽ち醫學的方法以外の民間療法に奇効のある所以を本能と物理と心理の三方面から解釋し民間藥篇では經驗上淘汰に淘汰を重ねて、現代の醫藥以上に奏効あるを確認された藥草藥木藥方を網羅し、たゝへば胃腸病にはゲンノショコがよい、解熱惡毒下しに蜥蜴や鰌に妙作用がある、ごくたみの十藥が諸病に用ひて奏効無比なるを敎へ、且つ一子相傳の秘藥にまで及び、其應用すべき病氣を示すこと無慮三百餘項。いかなる素人にも手輕に利用し得られるやうに詳述する。著者が久しい間の研究と實驗と調査の結晶であつて眞に家庭の常備書。

終